ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

スイショウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

【Ｎコード】
Ｎ８６６４Ｙ

【作者名】
スイショウ

【あらすじ】
依頼を終えて暇を持て余していた冒険者アウダー。彼の元に勇者を名乗る一行からとある依頼が舞い込んだ。怪物島と呼ばれるデルムリン島への案内を頼みたいというものだ。軽い気持ちで引き受けたこの依頼がアウダーの、彼の周囲の運命を大きく変えて行く。

※ａｒｃａｄｉａ様にて投稿している「勇者達の物語」の修正版です。ａｒｃａｄｉａ様での投稿分は後日削除いたします。

プロローグ～始まりの物語～（前書き）

この物語は「ドラゴンクエスト　ダイの大冒険」を原案として、作者のオリジナルキャラクター、独自解釈を加えて再構成しています。

そのため、ストーリー展開は原作に沿った部分もあれば、大幅に変化する部分もあります。

このために、「原作登場人物」の中には、設定・役回りが大幅に変化して登場するキャラクターもおります。

誤字脱字などありましたら、遠慮なくご指摘いただけると幸いです。

ご意見、ご感想もお待ちしております。

プロローグ～始まりの物語～

天界、魔界、そして地上界――
天地創造をなした神々は、次いで多くの種族を世界へと産み落とす。
人間、竜、魔族、そして多種多様な怪物（モンスター）達。
人間と竜と魔族は地上を治め、怪物達は種に応じてあらゆる場所で生息をしていた。
神々の庇護の元、大きな争いも無く平和に治められていた世界。
しかし、長きにわたる平和も徐々に陰りを見せ始める。

生物として、他の種族とは比較にならない力と知識を持った竜の傲慢。
多種多様な能力と長い寿命、強大な魔力という力を持った魔族の野心。
最も脆弱であるが故に、知恵を、道具を、武具を、魔法を用い、求める事を続けてきた人間。

長い時は、この三種族の間に生まれた僅かな軋みを巨大な歪みへと変化させ――やがて地上は三種族の覇権をめぐる争いの中に。

「……それで、世界はどうなったの？」

「この争いを怒り悲しんだ神様にですね、竜は知を、魔族は光を、人間はそれまで蓄えていたモノ全てを取り上げられてしまったんですよ」

怖いですねぇ。そう続けながら、男は幼い兄妹の目線に合わせるようにしゃがみ込んだ。
黒縁の眼鏡を外し、幼子を見つめる彼の眼差しは穏やかである。
泣き止みはしたものの、未だぐずついている少女と、どこかばつの悪そうな様子でそっぽを向いている少年。
少女の左手は少年の服の裾を掴み、その右手にはリンゴが一つ。
兄を見て、リンゴを見て。そうして少女はおずおずと手にしたリンゴを男へと差し出した。

「お互いがお互いを思いやり、分かち合い、理解し合おうとしていれば。きっと素敵な世界になっていたんでしょうねぇ」

男は懐からナイフを取り出すと、少女の手から渡されたそのリンゴを軽く放り上げ――

「ちょあぁあぁっ！」

奇声を上げた。
突如上がったその声に何事かと兄妹の気が逸れた一瞬の出来事であった。

「二人とも、手を出して下さい」

差し出された兄妹の掌にトトトッ、と何かが落ちて来る。それは綺麗に三つずつ六等分に切り揃えられたリンゴであった。
ただ等分しただけではなく、皮を耳に見立てたウサギ仕様である。男の技量と妙な凝り様がうかがえる。

「三つと三つ、半分個です」

わあっと表情をほころばせながら去って行く兄妹を、男は手を振り笑顔で見送った。
眼鏡を掛け直し、良い仕事をしましたねぇ、と内心浸りながらしばらくそうやって眺めていると

「先生〜、アバンせんせ〜〜〜〜い！　船を出してもらえるそうですよ〜〜！」

「おおっ、それはナイスですねぇ〜。グッジョブですよ〜ポップ」

その聞きなれた声に男――アバンが振り返る。大きく手を振りながらこちらへと駆け寄って来るのはトレードマークのバンダナを巻いた黒髪の少年――ポップの姿。
数少ないアバンの弟子の一人であり、未来の大魔法使いを自称している少年である。
もっとも、家出同然、事後承諾による押し駆け弟子でもあったが。

「ゼェゼェ……な、なんすスか……、その、グッ、じょぶって……」

「グッドジョブ、つまりは良い仕事という事ですよ」

よほど急いでいたのかゼェゼェと荒い息をつく弟子の姿に、明日からの授業は体力向上をメインにしようと誓うアバン。

（とはいえ、まあ……無理でしょうねぇ……）

訓練メニュー其の一で音を上げるポップの姿を想像し、その誓いを直ぐに撤回する。
同年代の少年達に比べてもポップの魔法使いとしての資質が十分にある事はアバン自身認めてはいる。

弟子となって数カ月ではあるが、既に魔法使いとしての初級の呪文をほぼ全て修めている事がそれを証明していた。
しかし、どうにもこうにも根性が無いというか堪え性が無いというか注意力散漫というか。
その成長を褒めた事が災いしたのか、生来の性格的な面か、そこからなかなか次のステップへと進もうとはしない。
何かと理由を付けては厳しくなる修行を避けようとするのだ。
ガツンと厳しく当たればよいのであろうが、ポップ自身が魔法使いとして成長するという事にそこまで必死になっている訳でもなく、アバンにもポップを急いで成長させる様な理由は無い。

（結局は本人のやる気の問題ですしねぇ）

「ハァ……ハァ……、と、とにかくですね、パプニカへの船は……出せる。……でも、もう直ぐに出港するって……ゼェ」

「とりあえずですね、深呼吸して落ち着きなさいポップ。船の件は分りました。ああ、彼はどうすると言っていましたか？」

「……フゥ……ハァ……。ああ、あいつなら『パプニカには鬼がいるから寄りたくない』って言ってロモス行きの船に乗っちまいましたよ」

あいつとは、旅の道中で出会ったとある青年の事である。師であるアバンと意気投合したのか、一月ほどであったが共に旅をしていた人物である。
腕が立つのは認めるが男としてあいつを認めるわけにはいかない、乗り越えるべき壁だというのがポップの認識であった。
鼻の下が伸びている辺り、その燃やしている対抗心はロクな事ではなさそうであったが。

「ふむ。ならば私達も急ぎましょうか」

うへへへへと怪しく笑いだす弟子の姿をなるべく見ない様にしてそう言うと、アバンはポップの身体をひょいっと小脇に抱えてみせる。

「はへ？」

「時間は有限ですからね。タイムイズマネー、急ぎますよ～」

何を、とポップが抗議の声を上げる間もなく、アバンは凄まじい速さで駆け出した。

「ちょちょちょ、せ、せんせ～～～～～～っ！？」

砂塵を巻き上げて爆走するアバン。

ポップの抗議は右から左。

「ちょ、うわっ！？　あぶ、あぶ、あぶぶぶ！！」

砂塵によって奪われた視界、時折り頬を掠める砂利や道行く人の叫び声。

何より恐ろしいのは地面と水平になっている自分の身体に揺れや振動を感じないという事。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬしんでしまう～～～～～～ッッ！！」

涙と鼻水を撒き散らすその姿を砂塵が覆い隠してくれていた事は、ポップにとってある意味幸運であった。

「……何やってんだあの二人……」

桟橋からロモス行きの船に乗り込もうとしていた件の青年は、目の前を駆け抜けた砂塵を呆れたように見つめていた。

ちなみにパプニカ行きの船が待つ桟橋を通り過ぎている。

「パプニカに行くんじゃなかったのか？　いや、気付いてないのか？」

伝えるべきかと思案しようとして――

「おい、兄ちゃんよ、乗るなら早く乗ってくれ！」

「ん？　ああ、悪い。直ぐに乗るよ」

船員の少しイラついた声に、まあいいかと二人の事は気にしない事にした。

「よ～しっ！　それじゃあ出港するぞーーーー！！」

地上界の中心に位置するギルドメイン大陸。

地上最大の大陸であるその地には、貿易大国であるベンガーナ王国、世界最強と称される騎士団を擁するカール王国、城砦王国と呼ばれるリンガイア王国など、世界有数の大国が存在している。

まさしく世界の中心たる大陸である。

そのギルドメイン大陸南端の半島に、アルキード王国という国が存在していた。
国力という点においては先の三国に劣るものの、他の諸外国と比較すれば、十分に大国と呼ばれるだけの力を持った国家である。
だが、それも全ては過去の話。
甲板に立った青年は、手すりにもたれかかりながらその視線をある方向へと向けた。
今、この世界にアルキードという名の国は存在していない。

時は十数年遡る。
魔王ハドラーと名乗った魔族が、闇の軍勢を率いて地上世界の征服を掲げて全世界に対し宣戦を布告。
地上界南東に位置するホルキア大陸に自らの居城である地底魔城を構え、宣戦と同時に地上侵攻作戦を開始した。
エルフやドワーフ、ホビットや土着の魔物など、聖邪善悪を問わず地上に生きる者全てを否応なく巻き込みながら、その戦火は加速度的に広がりをみせる。
『国境沿いの山村に魔王軍の襲撃あり』
各国がそうであるように、ここアルキード王国でも日に日に勢いを増す魔王軍への対応に追われ、城内は慢性的な人手不足に陥って

いた。
この日、兵からの報告を受けて対応に向かったのは既に一線を退き今では王の相談役として城に招かれていた老魔法使いブライ。
彼が動かせる僅かばかりの手勢を率いてようやくその場所へと到着した時、全ては焼け落ち灰と化した後であった。

「……生存者の存在は絶望的、か」

立ち上る煙、灰の中でくすぶる炎。直前まで村であった廃墟を眺めながらブライが苦々しくもそう呟いた時、ひどく慌てた様子の兵士から思わぬ報告が入る。

「ブライ様！　子供です！　民家の地下室から生き延びた子供が！！」

「な、なんじゃと！？」

魔王軍との戦いの中、多くの人々が大切な何かを奪われていたこの時代。今また家族を、友人を、思い出の全てを奪われた存在が生まれ続けている。
兵士が連れてきたのは、灰に塗れた子供であった。まるで感情を失くしたかのように表情を固まらせた幼い少年。

「……立ち向かったのでしょうな。扉の前にその子の両親と思わ――」

「――言わずともよい。して、この少年の他には？」

絶望視していた生存者の存在は希望だ。ならば他にもと一縷の望みをかけて問うたブライであったが

「いえ……恐らくは……」

「そうか」

うつむき答える兵士の言葉に、老いた今の自分の無力さを痛感する。

平和の中、老いを受け入れ自らの力を高める事よりも政の道を選んだ。その事を間違っていたとは思わない。

思わないが、それでも、あるいはと。そう思ってしまうのは己の未熟故か。

「ままらなんものじゃな」

そう呟くと、ブライは無言のまま立ち尽くしている少年を見た。

少年が何を思い故郷を、滅ぼされた村を見つめているのかはブライにはわからない。

珍しい光景ではない。

少年の見つめる光景は珍しいものではない。

魔王ある限り、世界では今まさにこれと同じ光景が、悲劇が繰り返されている。

こうして命があるだけでも少年は幸運であったと言えよう。

「じゃが、生きてさえいれば、で済ませるわけにもいかんな」

少年のその瞳に、怒りや悲しみよりも遥かに大きな憎悪の色を感じ取ったブライは、せめてその道を誤らぬようにと、静かに少年の硬く握られた手を取った。

そして数年後。
ブライに引き取られてからの少年は恵まれていたと言える。
新しい家族が、新しい友がいる。
年相応の明るさと活発さを取り戻した少年は、ブライに師事をして魔法使いとなるべく修行を始めていた。

「爺さん以上の魔法使いになる」

照れ臭そうにそう言った少年であったが、ブライは少年が自分に隠れて独自に体術や剣術の修行も行っている事に気付いていた。
未だ消えぬ魔王への憎悪が故に、少年が力を求めている事を知っていた。
強くなる事に異論はない。だからといって魔法も体術も幼い子供が片手間で習得できるような容易なものではない。
そこでブライは少年が肉体的な鍛錬に耐えられる身体に成長するまでは知識の習得を優先させる事にした。
幸いにもブライの知人にはその方面に長ける者がいる。古い友人の住むテラン王国へと向かわせる事とした。

テラン王国――ギルドメイン大陸にある、森と湖の国。
徹底した平和主義。時代の流れに逆らうかのように自然主義の思想を掲げ、そして衰退していった。
今では人口僅か五十人程となってしまったもはや名ばかりの小国である。
竜の神という諸国とは異なった信仰を持ち、名産になる物も無ければ、他国の人間があえて観光に訪れるような名所も無い。
定期的に訪れる商人以外は、外から来る者など滅多にいない。

まるで隠れ里のような雰囲気を持った寂れ行く静かな国。それがテラン王国であった。

しかし、テラン国王の知識と彼の蔵書は、この世界に並ぶものはないとされている。

変わり映えなく繰り返される穏やかな日々。それは戦う力を求める少年にとっては苦痛の日々であったが、それを打ち破ってまで無茶をする事もできなかった。

少年を迎え入れた祖母的な存在と妹分の圧力に屈したとも言う。

しかし、その変わり無き日々もテラン王より書庫の閲覧を許された日から一変する。

智に魅せられたのだ。

少年は日々の多くを書庫の中で過ごすようになった。

ほんの暇つぶしのつもりが、いつしかそれが目的となり。

食事も睡眠時間も滅茶苦茶になっていると、友人からの報を聞き、別の方向へ無茶を始めた息子にどうしたものかと頭を悩ませたブライであったが、その心配は杞憂に終わる事となる。

それは、ある一つの報が全世界を駆け巡ったためであった。

――勇者、魔王ハドラーを討つ。

少年の運命を変えた、七年にも及んだ戦乱の終結。

失われた復讐の機会、テランで得た新たな家族とも呼べる存在、月日の流れ、それらの全てが少年を変えていった。

成長した少年は、テラン王よりの推薦状を得て何を思ったのか僧侶となる修行を積むべくホルキア大陸にあるパプニカ王国へ旅立と

うとしていた。
戦乱後、魔王の支配下にあった多くの魔物が、邪悪な呪縛を解かれて人前から姿を消したとはいえ、元々地上に生息していた魔物までもが姿を消したわけではない。
魔王の脅威は失われても、生来の凶暴さを持つ魔物は人々の脅威として存在している。
故に魔王の存在が無くとも力を得る事は無駄にはならない。
少年からそれを聞かされた時、祖母ともいえるナバラはその事に首を傾げ、まだ幼い妹分のメルルは良く分っていないのかナバラの真似をして首を傾げていた。

「まあ、こんな時代だ。強くなって損は無いだろうが……。魔法使いから僧侶、そしてパプニカ。アンタ賢者にでもなろうってのかい？」

「賢者なんて大層なものになる気は無いし、なれないよ。ただ、さ。便利でしょ？」

「どっちも中途半端にならなきゃいいんだけどね。……アンタの人生だ、好きにやりな」

そうしてパプニカへの旅立ちを翌日に控えたある日の早朝。
復讐という目的を失ったとしても、習慣と化した鍛錬は早々止められるものではなく。
テランの森、その奥深くで日課の鍛錬を終えた少年がいつものように木の実や山菜を採って家へと帰ろうとしたその時であった。

「ん？」

背後に感じる気配に少年はその足を止めた。
手に持った籠をそっと置くと、いつでも呪文を放てるように精神を集中させて油断なく振り向く。

「何者だ」

ただでさえ人の少ないテランである。知人の気配ぐらいは分るし、用があるなら向こうから声をかけて来るだろう。

「……出て来い。警告は二度までだ。三度もするつもりはない」

果たして、木々の間から二人の男女がゆっくりと姿を現した。

「そこで止まれ。おかしな動きは見せるな」

鎧を纏いその背に竜を模した剣を差した男と、その男に肩を支えられ目深なフードを被った女性であった。
男は背の剣に手を伸ばそうとしたが、隣の女性がその手に触れて何事かを呟くとその緊張を僅かに緩める。
互いに身を寄せ合ったその姿に、少年の脳裏にふと今は亡き両親の姿が思い浮かぶ。
途端に緊張が失せる。拍子抜けした、と言ってもいいのかもしれない。

「……向こうに空き家がある。とりあえず、休むぐらいは出来る」

構えを解き、そう言って地面に置いた籠を手に取った少年は、二人に背を向けて森の奥へと向かい歩きだした。

その行動眉をひそめた男だったが、傍らの女性が頷くのを見ると、剣に伸ばしたその手を戻し、女性と寄り添いながら少年の後に続き森の奥へと進んで行った。

互いに無言で歩く事しばらく。

そうして進んだ先。少し開けた森の中には確かに一軒の小さな小屋があった。

「……すまない」

ここに至ってようやく警戒と緊張を解いたのか。

男の感謝の言葉に少年はひらひらと手を振る事で答えると、扉を開いて二人を小屋の中へと招き入れた。

相手が“ただの道に迷った旅人”であれば、家族の待つ家に連れて行くところであったが、少年が二人をここへと案内したのは理由がある。

疲労の所為か少年の記憶にある姿よりもやつれて見えたが、女性の姿がとある人物に似ていたためだ。

直接言葉を交わした事はないが、ブライに連れられた先で何度か目にした事がある。

本人かどうかは分らないが、何にせよ訳有りであろう事は見てとれた。

明日にはパプニカへ、というこのタイミングで厄介事には関わりたく無かったというのもある。

――ここはさ、一年以上前か。ベンガーナやアルキードでの暮らしに憧れて出て行った人の家。まあ、家というより小屋だけど

簡素なベッドであったが、放浪の身であった自分達には十分。
愛する妻を休ませると、緊張に満ちた長旅の疲れが一気に襲い掛かったのか。
男は椅子に深く腰掛けると、何をするでもなく、ただ呆然と天井を見詰めていた。
戦うために生まれた男にとって、たかが追手如き何人向かってこようが物の数では無かったが“何かを守りながら”という行為がこれ程までに自身に疲労を強いていたとは思いもしなかった。
その事実が歯がゆくもあったが、不思議と悪い気はしなかった。

――好きに使ってくれって言ってたからさ、別にここに住んでも文句は言われない

そうして暫く。
自分が眠っていた事に気付いた彼は、慌てて立ち上がると急ぎ辺りを見回した。
追手がかかる可能性が常にある以上、迂闊に気を許すわけにはいかなかったのだ。
周囲の気配を探り、ベッドの上で穏やかに寝息を立てる妻の姿を見て落ち着きを取り戻すと、「ああ、そうか」と呟き再び椅子に腰を下ろした。
まどろみかける意識の中で、彼は先程出会った少年の事を思い出していた。

――おれも時々使っていたからね。シーツを置いていたのは偶々だったんだけど

脇にあるテーブルを見れば、そこには中身の入った籠。干し肉や干物などの食料、薬草らしき医療品が置かれていた。

――ここを出て少し行くと川がある。北に行くとテランだ。何も無いトコだけど人手位はある。まあ、爺ちゃん婆ちゃんばかりだけどな

いくら疲れがあったとはいえ、人が訪れていた事に気付けなかったという事実は、戦場に生きた彼にとって看過出来る事ではなかったが。

――おれは明日にもこの国を離れる。パプニカに行くんだ。僧侶になるって言ったら婆さんには首を傾げられた

――多分もう会う事もないと思うから、気にしなくてもいい。お互い名乗らなくてもいいか

そう言って出て行ったはずの少年の心遣いに、思わず笑みを浮かべてしまう。

結局、そのまま流されるようにお互い名乗ることも無かったが、縁があればまた出会うことがあるのだろうか。

静かに眠る妻の元へ向かった彼は、愛おしげにその頬に触れると、表情を穏やかなものに変えて呟いた。

「ここから始めよう、ソアラ。やがて生まれる子と共に、この地で穏やかに暮らそう」

少年がパプニカ王国へと赴き一年程が過ぎようとした頃、ナバラから一通の手紙が届いた。

それは、旅先の少年の身を案ずる当たり障りの無い内容だったが、

ナバラはその道では高名な占い師である。
そんな彼女がこの一年出した事の無い手紙を出した。
ブライとも暫く会っていなかった事を思い出し、これも良い機会かと、少年はパプニカ王の許しを得て故郷への帰路に就いた。
本来はアルキード王国への直行便に乗りたかったのだが、渡航規制が発せられたとの事で、隣国のベンガーナ行きの便に乗り少し遠回りする事になった。
ベンガーナ王国はアルキード王国と同じ半島の北側に位置する国であり、ナバラの待つテラン王国の隣国でもある。
ブライかナバラ、どちらから向かうかとの考えが纏まらぬまま、ベンガーナの港に着いた少年は、そこで気になる話を耳にする。
――魔物に王女を奪われたアルキード王が見事魔物を捕え、公開処刑を行う

少年の脳裏に浮かぶのは、あの森で出会った二人の姿。
馬鹿な、と少年は思った。
互いに寄り添う二人の姿は、一年経った今でもはっきりと思い出せる。
間違いであれと、少年はアルキード王国へと急いだ。
今更少年が行ったところで何ができるとも思えないが、ブライであれば、王の相談役でもあったブライであればきっと何とかしてくれると。

それは、一瞬の出来事であった。
駆ける少年の視界の先に、ようやくアルキードの城門が見えたその時――

眩い閃光が視界を焼く。
轟音が鼓膜を破る。
爆風が少年の身を包み込み、その身体を遥か上空へと吹き飛ばしていた。
大地に叩きつけられ、全身を襲う痛みによって意識を失う事もできず。
迫り来る死の予感と恐怖に泣き叫びそうになるが、動かぬ身体ではうめき声一つ上げる事すらできない。

（死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない嫌だ嫌だいやだいやだい……）

死を拒絶しながらも、暗転する意識に苦痛からの解放を感じる取る少年。
その甘い誘惑は甘美で抗いがたく。
それでも――抗った。
それは、何も分からず知らず、理不尽に死を迎える事への怒りであり、一瞬とはいえ苦痛からの解放を願い、死を受け入れようとした自分への怒り。
それは、意地。両親から託された命。自分の命の価値という目に見えぬモノに対しての誇りからくる意地。
少年の心は、ただひたすらに迫りくる死に抗い続けた。

どれほどの時間が過ぎたのか、それとも一瞬でしかなかったのか。
暗闇の中であがき続ける少年に、一筋の光が差し込む。
その光を掴もうと手を伸ばし――
いつしか少年の視界には、太陽に向けて伸ばされた自分の腕が映

っていた。

全身に感じる痛みは耐えられない程ではなく、ゆっくりと起き上った少年は、目も耳も、自分の五感が回復している事を確認すると、覚えたての回復呪文を唱えて傷を癒した。

あれはいったい何だったのか。

暫く身体の状態を確認していた少年であったが、風に吹かれて薄れ始めた砂塵の向こうから覗いた光景には、咄嗟に言葉を失った。

「地面が……アルキードが……大地が……消えた？」

その呟きの向こう。

先程まで人々の営みがあった、町が、城が、大地が。

その場所は、今は轟音と共に渦巻く巨大な入り江と化していた。

少年はただ呆然と、何が起こったのか理解できぬまま、その場でただ立ち尽くす事しかできなかった。

全てを無くしたあの幼き日のように。

ゆっくりと視線だけを動かす。

そこには

ナニかを抱え

飛び去る

何者かの

ひどく小さな背中が見えた

――アルキード王国消滅。

この報は瞬く間に世界中に広まったが、誰にもその原因を突き止める事はできず、様々な憶測だけが飛び交う事となる。

魔王の呪い、禁呪を行使して失敗した、新たな魔王が現れた。

復興の兆しも見え始め、人々がようやく以前の平和な生活を取り戻そうとした矢先の出来事であった。

この日、世界からアルキードと呼ばれた国が消えた。

その強大な暗黒の力によって、この地上を支配せんと企んだ魔王ハドラーが、勇者とその仲間達に倒されてから十数年。

未だ各地にはその傷跡を残しつつも、人々はようやく手にした平和な時間の中で、逞しく日々の生活を営んでいた。

世界四大陸の一つであり、地上界南西部を占めるラインリバー大陸。

その地にあるここロモス王国も、今では戦火から立ち直りかつての賑わいを取り戻しつつあった。

「だ〜か〜ら〜、この際多少手強くてもいいからね？　もうちょっと金になるのはないの？」

そう言ってカウンターに詰め寄るのは、僧侶が纏う法衣をだらしなく着崩した青年である。

アバン達と別れ、一人ロモスへと向かった青年であった。

腰まで伸ばされた長い黒髪は首の後ろで一つに束ねられ、腰には細身の剣を差している。

それなりの体格の良さも相まって、一見すると戦士のようにも見えるが、青年は自分を僧侶だと主張する。

洗礼を受け、僧侶の呪文を取得しているので決して嘘ではない。

嘘ではないのだが、青年の人柄や戦い方を知る者は口を揃えてこう言う。

――嘘くせえ、と。僧侶なめんな、と。

「あのなアウダー、ここはどこだ？　ロモスだぞ？　そんなに金になるモンスターを探したけりゃあ、迷いの森か他の国にでも行け。オーザムとかリンガイアなんて稼ぎどころじゃねえか？」

「ふざけるのは髪型だけにしとけよオッサン。大陸を越えられるような、そんな路銀があったらね、誰が好き好んでオッサンの顔を見に来ますか」

青年の名はアウダー。

立ち寄った街や村で、ちょっとした仕事をこなしながら、ふらふらと旅を続ける二十一歳の自称冒険者である。

魔王の脅威が去った後でも、元々地上に生息していた魔物の中に

は、その生来の気質からか、魔王の呪縛とは関係なく人を襲う魔物がいる。
そういった中で、凶暴な魔物の退治や、平和になった事で再び現れ始めた山賊、海賊などの討伐、行商人の護衛や宝探しなどの荒事を生業とする冒険者という存在が、再び脚光を浴びるようになっていた。
魔王の引き起こした戦乱は、各国の軍事力を大きく削ぎ落し、かつてのように自国の兵のみで国内の治安を守る事が困難になったのも一因である。
ここ“ルイーダの酒場”と同じく、魔王の戦乱の終結した後は、酒場や宿屋の多くはこうした冒険者への仕事の斡旋場としての役割を再開していた。

「なんだと！　この斬新な“アフロヘヤースタイル”を馬鹿にするのか！　これはベンガーナ王国で今最もナウいファッションなんだぞ！」

そう言って、カウンターから身を乗り出し、顔を真っ赤にして唾を飛ばしながら力説する主人。
そのあまりの勢いに眉を顰めながら、「誰に聞いたの」と呆れながら尋ねたアウダーに返ってきたのは、ある意味で想定の範囲内。

「黒縁の眼鏡をかけて、髪の毛がこうクルクルとした兄さんだ！」

「あ～、うん。やっぱりね。何と言うか、ゴメン。何も言えない」

懐から取り出したハンカチで、飛ばされた唾を拭きながら、アウダーは相変わらずムチャクチャ言うなと、心当たりの人物を思い浮かべていた。

アバン・デ・ジュニアール三世。
自称勇者の家庭教師、という変人である。変態ではなく、変な人という意味での正しく変人。いや、これもまたある意味で変態かもしれないが。
アウダーとは、出会った先で何度か一緒に仕事をした仲ではあるが「どういう人物か？」と問われれば、そうとしか言いようが無い。
確か、今は弟子のポップと一緒にパプニカへ渡ったと思っていたが。
あの後、結局船に乗れずにロモスに来ていたのだろうか。

「ま、可哀想なオッサンはおいといて。今日はルイーダちゃん居ないの？　俺、あの娘がいるからここを利用してるのよ？　オッサン、いいから隠してないで出しなさい」

「お嬢はお城に定期報告。残念だが今日一日は戻らねえよ。つーか、オッサンを連呼するんじゃねえ！」

まったく、どいつもこいつもルイーダ、ルイーダと言いやがって、とぼやきながら不貞腐れる主人。
諸国に比べて、魔物の被害という意味では比較的安全な部類に入るロモスには、冒険者に向いた仕事というのはあまり多くはない。
つまりは平和であるのだが、それはソレ、これはコレ。
そんな中で、ここルイーダの酒場が繁盛しているのは、王国直轄の斡旋場である事と、客の大半が酒場の名前にもなっている女性、ルイーダ目当てなのが大きい。

「なんだ、今日はハズレの日？　んじゃもういいや。オッサン、一番安い酒頂戴。もうね、今日は飲んで寝るよ。お兄さんは頑張った」

「大概失礼な奴だなお前は。頑張ったって、まだ何もしてねえだろ

うが」

昼間ッから何言ってやがる、とその言葉に苦笑しながらも、注文よりも少しだけ良い酒を出そうとする主人。

何だかんだ言ってはいるが、請けた仕事はちゃんとこなすし依頼人からの評判もなかなか良いアウダーは主人にとって手放し難い大事な客だった。

「オッサンに若さを吸い取られないように頑張ったんだよ？」

やっぱりどうでもいいか、こんな奴。

さりげなく記帳した代金を上げる主人。

酒のランクも落とす。

ちなみにツケである。

渡されたグラスを手にしたアウダーは、ぼんやりとグラスを眺めていると、そこに映った絵が気になり、背後の壁に張られた手配書に目を向けた。

「オッサン、何あの張り紙。新しい手配書？」

凶悪な魔物や犯罪者などが描かれた紙の貼られた看板に、一際目立つ物があった。

翼の生えたスライムが描かれたその紙は、日に焼けた跡もなく歪みも少ない事から、比較的新しい物だという事が分かる。

「ああ、ゴールデンメタルスライムだとさ。デルムリン島って知ってるか？　どうやらあの怪物島に居るらしいんだよ。どこかの好事家が欲しがっているらしくてな。デルムリン島って事が嘘くさいんだがよ。一体誰が確かめたんだ、ってな。まあ、それでもだ、あそ

こなら何が居てもおかしくないってのが微妙だよな」

「一、十、百……百万ゴールド！？　ありえないでしょ、ナニコレ？　どこの馬鹿野郎？　コイツのイタズラじゃないの？」

あまりに馬鹿げた金額に、アウダーは思わず口にした酒を噴出しそうになる。

ちなみに、その横に『いたずら注意』と書かれた小憎たらしい表情の大ねずみの手配書もあったが、その金額は十ゴールドである。

「依頼主は確かだよ。ゴールドだってちゃんと払えるぐらいのな。まあ、それだけ希少だって事なんだろう」

金を持っている奴は持ってるんだよ、そう言う主人には哀愁が漂っていた。

「デルムリン島にねえ。あの近くまでだったら、この間行ったけどね。そんな珍しいスライムが居るなら、あの時漁師さん連中に無理言ってでも上陸させてもらえばよかったか？」

先日、アウダーは近くの港町に住む漁師から、漁の邪魔をする海の魔物“マーマン”を退治して欲しいとの依頼を受けて、デルムリン島近くの沖合まで行っている。

件のマーマンであるが、仲間を引き連れて現れたので、とりあえずリーダー格とおぼしき一匹に少し派手な一撃を与えると、涙目になってさっさと逃げ出してしまった。

まるで弱い者いじめのようで、どうにも居た堪れなくなったアウダーは、魔物に怯えて待っていた漁師達に、島に近づかなければ大丈夫と報告した。

世界のどこかにあるという、心優しき魔物達の最後の楽園。

誰もが魔物を恐れ、信じようとはしないその噂の場所は、案外デルムリン島なのかもしれないと、その時の光景を思い出しながら、アウダーはグラスを口にした。

特に急ぎの予定もなかったアウダーは、そのまま主人と雑談を続けていた。

やれ、あの店のサービスはどうだの、道具屋の看板娘さんが最近化粧を覚えたのはどうだのと。

「馬っ鹿、オメ、あの尻が良いんだろうが、尻が」

「だからオッサンなんだよオッサンは。分かってないなオッサンは。尻とか胸とかはいいんだ。愛だよ愛。あとは性格と顔とプロポーション」

「だから！　オッサンを連呼すんじゃねえ！　結局全部じゃねえか！　ふざけんなこのヤロウ！！」

「ナメンナよ？　巨乳だろうが貧乳だろうが問わないぜ？」

女性についてどうこう言う前に、自分達をなんとかしろとはこの時酒場にいた客達の共通の見解であったが誰も口にはしない。

いい感じにぐだぐだになり始めた二人はなおも止まらない。いつもであればこのあたりでルイーダの鉄拳が唸るのだが生憎不在。

やがて互いの生活態度に話が向かい、アウダーがかなりの数の魔物討伐を行っている事に、仮にも神に仕える僧侶様がそんな好戦的でいいのか、と主人が問えば「それはそれ、これはこれ。今の世の中、人間生活していくにはお金は大事よ」と、これまた聖職者にあ

るまじき俗っぽい答えを返す。

（（謝れ！　世界中で一生懸命頑張っている僧侶たちに謝れ！！））

店内の客たちの心が一つになったが、馬鹿二人には届かない。

そりゃあそうだ、と馬鹿二人で笑いあっていると、

「あなた、デルムリン島に行った事があるのなら、私達を手伝ってくれる気はないかしら？」

背後からのどこか媚びるような艶を含んだその声に、アウダーが振り返った先には四人の男女の姿があった。

グラスを持った女僧侶と、小柄な老魔法使い、巨漢の戦士と目つきの鋭い男である。

「船は手配できたんだが、案内人がいなくてね。できれば手伝ってもらえるとありがたい。もちろん報酬は払う」

眼つきの鋭い男の言葉に、盗み聞きとは趣味が悪いな、と思ったアウダーであったが、懐が寂しいのは事実。

報酬の部分を強調されたのは、金さえ積めばと思われているようで、釈然としなかったが、

（案内するだけで構わないのなら暇つぶしにもなるか）

そう考えていると、興奮した様子の主人がアウダーに詰め寄りまくし立てるように話し出した。

「おい、ありゃあ、最近噂になっている勇者様御一行だぞ。凄いじ

ゃねえかアウダー。勇者様直々のご氏名を貰えるなんてよ！」

別に道案内が出来れば誰でも良かったんだろ、と思いはしたが、主人のアレなはしゃぎっぷりに黙っておく事に。

（それにしても、またえらく嫌な感じのする勇者様だことで）

勇者という言葉で、アウダーの脳裏に年甲斐もなくVサインをするあの変人さんの姿が浮かんだが、頭を振って掻き消す。

そうこうしている内に、主人と勇者様との間で、アウダーが御一行の案内をする事が決定してしまっていた。

「ほう、お前さんがあのアウダーか。なかなかに評判の良い冒険者らしいの」

老魔法使いの人を値踏みするような目線に少し腹が立ったアウダーだが、俺は大人、俺は大人と自制する。

「勇者などと大それた者でもないが。さて、私の名前はでろりん。彼女はずるぼん、そこにいる魔法使いがまぞっほ。そして彼がへろへろだ」

その丁寧で礼儀正しい姿勢に胡散臭さも感じはしたが、「よろしく頼む」と、でろりんから差し出された右手をいつまでも放っておくわけにもいかず。

急ぎの仕事もないし主人の顔を立ててやるかと、アウダーはその手を取った。

「アウダーだ。ま、短い付き合いになるだろうけどな。よろしく頼むわ、勇者様」

怪物島の少年

降り注ぐ太陽の光を反射してきらきらと輝く穏やかな波間の上を飛沫をあげて進む一隻の帆船。
その甲板には、目前に迫ったデルムリン島を眺める四人の男女の姿があった。

「思っていたほど……大きくはないな」

手にした望遠鏡を片付けながら、それに近くに魔物はいないようだと告げるでろりん。

「キッヒッヒッ。あれだな、モンスターの生き残りがウジャウジャいるっていう島は……」

「またひと暴れしてやるかぁっ！」

これからの事を想像し、嬉々としてそれに答えるまぞっほとへろへろ。
彼らからは、魔物の住む島に向かう事への緊張感といったものは感じられない。

「魔王が死んで、大人しくなったモンスターをいびり倒してりゃ、後は周りが勝手に勇者様と崇めてくれる」

こんなにオイシイ商売はないぜ、と顔を歪めて笑うでろりんに、まったくだと答えてまぞっほとへろへろは笑う。

「……ちょっと待ちなよ」

そうやって笑いあう三人を制止したのは、腕を組みながら彼らを睨み付けたずるぼんであった。

「アイツのことを忘れてるんじゃないでしょうね？　嫌よ、ここまで来て計画をおじゃんにされるのは」

「む」

「まあ、そうなんじゃがな」

どうにか船は手配できたものの、魔物への恐怖からか、なかなかデルムリン島までの案内人が見つからない。

戦う力を持たない普通の人にとって、魔物の巣窟とまで言われるデルムリン島に行くなど正気の沙汰では無かったのだ。

これからどうしようかと、酒場で話し合っていたところ、偶然にも耳にした会話。それは彼らを惹き付けるには十分過ぎる内容であった。

『デルムリン島にねえ。あの近くまでだったら、この間行ったけどね』

そして主人と雑談を交わしている青年のだらしない姿に、金で釣れそうだと考えたでろりん達は、この訪れた幸運に感謝しながら青年――アウダーを利用する事に決めた。

あまり乗り気ではない様子だったが、都合のよい様に誤解をしてくれた主人のおかげで案内人として雇えた。そこまでは良かった。

問題は、まぞっほがお世辞で言った「評判の良い冒険者」が事実だった事。

準備があると言って一旦別れた後、でろりん達がアウダーについ

て調べてみれば出るわ出るわ。
この一ヶ月の間にこなした依頼は十八件。その全てが魔物の討伐という偏りっぷりに呆れもしたが、迷いの森のライオンヘッドを一人で仕留めたという話には、でろりん達も顔を引き攣らせるしかない。
正直、自分達より勇者らしくないか？　と思いはしたが、酒場で見た彼のあのだらしない姿、気の抜けた駄目ッぷりを見せられては、誰も勇者などと呼びはしないだろう。

「外見や雰囲気ってのは大事だよな」

「まったくだな」

「雰囲気はだいじだ」

うんうん、と頷き合うでろりん達を「いい加減にしな！」と、目尻をつり上げて睨み付けるずるぼん。
背筋を伸ばし直立の姿勢で固まる男達。

「そうじゃないだろ！　アイツに知られたら面倒だって言ってるんだよ！　今回の目的を忘れてんのかい？　横取りされたらどうするんだい！」

「まあまあ、そういきり立つでない。小皺が増えるぞ？」

肩を怒らせて興奮するずるぼんを宥める、ニヤリと口元を歪めてまぞっほが続ける。

「な～に、心配はいらんよ。さっきあいつが船室に降りよった時にな、こう、ドア越しにラリホー（睡眠呪文）をかけてやったからな。

当分は目を覚まさんて。どれだけ強かろうと、油断しておればどうとでもなる」

それにワシのラリホーは天下一だからな、そう言って胸を張りまぞっほは笑った。

「ふぅん、ならいいんだけどさ」

自信たっぷりに言い切ったまぞっほに、それでも念を押す事は忘れない。小皺の件は後で問いただす。

「ならいいんだけどね。いいかい、忘れるんじゃないよ。あたし達の目的は――モンスター退治じゃないんだ」

「世界に一匹しかいないという幻の珍獣……」

「ゴールデンメタルスライム……か」

まぞっほの言葉に、口元を歪めるでろりん。

「でも、本当にいるのか？」

「いないなら島中皆殺しにして、いつも通り報酬を頂くだけよ」

笑みを浮かべて返すずるぼん。

悪党め、とそれを笑うでろりんであったが、船のものではない激しいしぶきの音が聞こえ、慌てたように視線を海へと向けた。

そのただならぬ様子に、何事かとその視線を追うように海を見た三人の視界に、マーマンの背に乗って船へと近づく人影が映っていた。

「な、なんだい？　新手の魔物かい！？」

「ま、まぞっほ。魔法だ魔法！！」

「お、おおう。え、え～と、え～となんじゃっけ！？」

途端にパニックを起こす三人。

でろりんも内心かなり慌てていたが、目の前でこれだけ慌てられるのを見ると、逆に落ち着けるもので。

「お前ら、本当にアドリブに弱いな」

自分の事は棚に上げ、向かって来る人影に目を凝らす。

「落ち着け、お前ら。あれは……子供か？」

「あ～っ！　や、やっぱり本物だあ！」

マーマンの背から甲板へと器用に飛び移り、四人の前に立ったのは黒髪の少年。

ぱっちりとした目、背中に背負った木刀と右頬にある十字の傷。まだあどけなさが残るものの、その印象はまるで田舎の腕白坊主である。

「ほ、本物の勇者さまですね！」

感激した様子で「すごいや！」と連呼して、きょろきょろとせわ

しなくでろりん達の様子を伺う少年。
思わず背中の剣に手をかけるでろりんであったが、それを制したのはずるぼんであった。
男達に何も言うなと目線で合図すると、今まで彼らには見せた事がない優しい表情を浮かべてずるぼんは少年に話しかけた。

「ぼうや、あなたは？」

「おれっ、ダイです！」

子供達にとって勇者とは共通のヒーローである。
夢にまで見た、憧れの存在である勇者と出会えたという緊張のため、直立の姿勢で答えるダイ。
デルムリン島で暮らし、そこに生きるモンスターは全て自分の友達なんだ、と嬉しそうにずるぼんの質問に答えるダイ。
二人から少し離れて様子をうかがっていたでろりん達は、あまりにも上手く進むこの状況にほくそ笑んでいた。
しかし――

（（（女ってこえーな））））

内心、そう思っていた事は彼らだけの秘密である。

第１話　怪物島の少年

背中に叩きつけられた様な衝撃、次いで鼻に感じた激痛、口中に広がる潮の味。

「ぶっ……うわっ、っぷ！？　ぶるあぁぁあアぁぁああハアアぁあ！！
はあ、は、あ、ハァハァは、は……は？」

ラリホーの効果が消えて目を覚ましたアウダーは、自分の置かれた状況に愕然としていた。
前を見れば去って行く船、後ろを見れば所々から煙を立ち昇らせているデルムリン島。
そして自分は海の中。

「……やられた……」

アウダーは最初から彼らを信用も信頼もしてはいなかった。
しかし、本物か偽者かはともかく、人々に顔の知れた勇者様御一行が、まさかこんな強硬手段を取るとは思いもしていなかった。
予想すらしなかった。というより予想できる訳がない。

（……本当に短い付き合いだった）

ご丁寧な事に、身包みを剥がされてはいなかったが、財布に道具袋が無い。
大事な荷物は宿に置いてあるので、財布の中身については一晩豪遊をかましたと思えば――思えるかこの野郎。
剣を残してくれているのはせめてもの優しさと取るべきか、デルムリン島で一生過ごせとのメッセージと取るべきか。

「フッ……穏やかな日々は一流の戦士を牙の抜けた狼にしてしまうのだな」

格好良くきめてみたが、それに反応してくれる者は誰もいない。

「……三倍返しだコノヤロウ」

それは基本だと復讐を決意したアウダーは、取り敢えずはと、デルムリン島へとゆっくりと泳ぎ始めた。

そうして泳ぎ続ける事しばらく。

どうにか海岸に上陸を果たしたアウダーは、砂浜に剣を放り出すと、頭を振って水気を飛ばし、長い髪を絞る。

いっそ髪を切るか、とも思ったが――止めた。

そして、濡れた上着を脱ぐと、八つ当たりをするかのように力強く絞り上げる。

本当はズボンとブーツも何とかしたいところだったが、ここは未知の怪物島。何があるか分からないと考えて諦めた。

パンツ一丁で戦う男、そんな重い十字架は背負いたくはなかったのだ。

実際、島の奥からはなんだか分からないが叫び声のようなものが聞こえている。

「出っ歯？　居る居る？　何だ？」

人の叫びにも聞こえるが、この島に人間が住んでいるなんて話は聞いたことが無い。

もっとも、誰も確認したわけではないのでいないとは言い切れない。

「人がいるならラッキーなんだけどな」

幸いにも日は高く、照りつける日差しはこのまま海に入りたいと思うほど。

しばらくすれば乾くだろうと、絞り上げて少しはマシになった上着を着直して、投げ捨てた剣を腰に差したアウダーは、島の奥へと足を向けた。

「ふう、これである程度の怪我をした者は……もうおらんな？」

海岸から少し奥に入った場所である。

周囲に横たわる負傷した魔物――住人達の姿を見て、これも因果応報という奴なのかもしれん、と溜息を吐く一匹の年老いた魔物。

幾多の呪文を操る鬼面道士。名をブラスという。

デルムリン島に住む、争いを嫌い、平和を望んだ魔物達の纏め役であり、この島に流れ着いた人間の幼子を、魔王の呪縛から解き放たれて取り戻した善なる心をもって、厳しくも温かく育てた心優しき魔物である。

流れる汗を拭いながら、やれやれと近くの岩に腰を下ろす。

そうして一息ついたブラスであったが、その表情が晴れることはない。

「どうしたものかのう」

眉間を抑えながら、思い出すのは先程の大切な息子――ダイとのやりとりであった。

ダイが勇者様と紹介して連れて来た四人の人間達による、突然の

襲撃。
抵抗すれば良かったのであろうが、この島にすむ住人達は皆争い事を拒み集った者達。
自衛のためとはいえ、その牙や爪を振るう事を躊躇う者が多かった。
不幸中の幸いか、さしたる抵抗もしなかった事で命まで失う者はいなかったがその傷跡は深い。
彼らの目的はこの島の住人であり、ダイの親友であるゴールデンメタルスライム――ゴメの捕獲。
眼前の光景に怒り、彼らに果敢に立ち向かったダイもまた返り討ちにあい傷を負ってしまう。
騙され、島の皆を傷つけられ、大切な友達を連れ去られて、怒りと悲しみに震えるダイに、思わず与えてしまった力。

魔法の筒――中に生き物を一体だけ封じ込め、呪文を唱える事で中の生き物を出すことも、筒を向けた相手を閉じ込めることもできる魔法道具（マジックアイテム）。

良かれと思い渡したものの、それを人前で使ってしまった場合、普通の人間にはそんなダイの姿がどう映るのであろうか。
それが遥か昔に存在していた“魔物使い”として見えてしまうであればまだいいが、ダイ自身が魔物として恐れられてしまうのではないか。
人間が、時には魔物すら恐れるほどの凶悪な一面を見せる場合がある事を、ブラスは知っていたからだ。
しかし、現状であれ以外にダイの思いを適える事も、攫われたゴメを救う方法も無かったと、ブラスは苦悩する。
耳を澄ませば、島のあちこちから、ダイの「イルイル！」と呪文を叫ぶ声が聞こえてくる。
比較的軽傷であった住人達を集めて、やはりあの偽者共の元へと

行くつもりなのだろうと察し、どうにもならない現実に歯噛みする。
周りで傷を癒す住人達も、ブラスと同じことを思っているのか、ダイの声が聞こえる度に、心配そうな様子でその方向へと顔を向けていた。

だから、気付かなかったのだろう。

自分達のすぐ近くに、招かれざる客がもう一人やって来ていた事を。

「あんな奴ら勇者でもなんでもないっ！　一緒に行ってぶちのめしてやろうぜ」

「がうがう！」

木々が生い茂る森の中。
そしてゴメちゃんを取り戻そう、と続けるダイの言葉に、了承を示すように前足を器用に挙げて答えるサーベルウルフ。
頬に絆創膏を貼り、所々に包帯を巻いた痛々しい姿であるが、ダイの瞳に諦めの色はない。
住人達もさすがに仲間がさらわれてしまった以上、このまま何もせず黙っている訳にもいかなかった。

「がうッ！」

「よお～し、いくぞーっ。イルイルッ！」

ダイが手にした魔法の筒を向けて呪文を唱えると、サーベルウルフは淡い光に包まれて筒の中へと消えていく。

「頼むよ」

それを見届けると、五体満足であった島の住人のほぼ全てが協力をしてくれた事に、ダイは胸に温かいものを感じ、より一層決意を強くする。

「やっぱりじいちゃんはすっごいよなー。こんなアイテムを持っているなんて。でも、もっと早く教えてくれても……」

ブラスにしてみれば、立派な魔法使いにしたいとの願いもむなしく、勇者を夢見て腕白盛りに育ってしまったダイの悪戯を警戒して話さなかっただけである。

そうして島中を周り終え、ゴメ救出の準備が整ったダイは、その事をブラスに知らせるべく駆けだそうとして――

「な、誰だ！　さっきの偽者の仲間かっ！？」

その時、木々の隙間から見えた見慣れぬ人影に声を上げた。

背中に差していた木刀を握り締めて、じっと人影へと注意を払う。

「誰だッ！　出て来いっ！」

「あ～、はいはい。そう怯えなさんなっての」

そう言って現れたのは一人の青年。

その腰に差された剣に気が付くいたダイは、途端に偽者達に襲わ

れた時の事を思い出してしまい、その恐怖に木刀を握る手が震える。
（っ！　怖がるな、怖がるな、怖がるな。ゴメちゃんを助けるんだ！　みんなのカタキを討つんだ！　俺がみんなを守るんだ！）
友達や島の皆の事を思う。するとダイの身体から緊張が抜け、恐怖は去り、眼前の敵へと立ち向かう勇気が湧いてくる。
「これ以上、みんなを傷つけるなんて俺が許さない！　そうする気なら、俺がやっつけてやる！」
子供とは思えない鋭い踏み込みを見せ、上段に構えた木刀を目の前の青年へと真っ直ぐに振り降ろした。
しかし――
ダイが全力で放ったその一撃は
青年の掌へと吸い込まれるように
パンと乾いた音をたてて受け止められていた。
「う、あ……く、くっそー！　放せ！」
その光景に、一瞬呆然としたダイだったが、慌てて青年の手から木刀を取り戻そうと躍起になって力を込める。
どれだけ力を込めてもびくともしない状態に、ダイは木刀以外のことから完全に注意を欠いていた。
その事に気が付いたのは、自分の頭に置かれた掌の感触を感じた時だった。

「ホイミ」

咄嗟に目をつぶってしまったが、全身を包み込む暖かい感覚に閉じた目を開く。

全身を包むやわらかな光。それが回復呪文の光である事を察して、ここでようやくダイは落ち着いて青年の顔を見る事ができた。

少しだるそうな表情をした青年であったが、彼の浮かべる苦笑に、ダイへの敵意は感じられない。

木刀から手を離し、自分の身体を見れば怪我が治っている。

ひょっとして自分はとんでもない勘違いをしたのでは、と慌てて青年を見れば――つま先を押さえて蹲っていた。

タイミングが悪かった、としか言いようが無い。

青年――アウダーが落ち着いたかと、木刀を手放したのとダイが手放したのは全くの同時。

当然、重力に従って木刀は落下した。

アウダーの左足、その小指の上に。

海岸から現れたアウダーが、偽者共にしてやられたと経緯を話し、あの場にいた島の住人達の傷を回復呪文によって治療した後。

ブラスがいつまで経っても戻って来ないダイを心配し、何かあったのかとアウダーと共に探しに向かった先での出来事であった。

「あれは……痛そうじゃのう……」

物陰から二人の様子を見ていたブラスは、タンスの角に足の指をぶつけた時の事を思い出し、身が震える気分になった。

ブーツの上からとはいえ、あれは痛かろうと。
目の前ではひたすら謝罪を繰り返すダイ。
心配をかけまいと大丈夫だと平静を装いつつも、その目が泳ぎまくっていて明らかに不審過ぎるアウダー。
どうにも進まない状況に、ブラスは溜息を吐き二人の前に姿を現す事にした。
暴力に訴え、他者が傷つく事も厭わない人間。
癒しと許しを与える事の出来る人間。

十人十色。人間とは、やはりよく分からない不思議な存在だ、と思いながら。

胎動

すまない、と頭を下げたアウダーを前にして、ダイはそれにどう答えたものかと悩んでいた。

目の前の青年が、親友であるゴメちゃんを攫いに来た偽勇者達の一味であった事には、確かに腹が立った。

しかし、偽物達を本物の勇者様と勘違いして島に招き入れたのはダイ自身である。

ブラスが言うには、アウダーは怪我をしていた皆の治療を手伝ってくれたらしい。

事情を聴けば、元凶はあの偽者達だという事は分かる。

島の皆を助けてくれたアウダーを、今更非難するつもりはダイには無い。

（気にするなよ、は違う。騙された同士だね。……違う。う～～ん……なんて言えばいいんだ？）

ダイは考えるよりも先に動くタイプであったため、こうやって思い悩むような事は苦手だった。

だから――難しく考えるのは止めて、まずは思った事をそのまま口にする事に決めた。

「皆を助けてくれてありがとう」

「いや、ホントにすま……は？」

非難の一つや二つは覚悟していたアウダーは、そう言ってへへへと笑うダイの姿をまじまじと見た。

そうして暫く、呆然とした表情でダイを見ていたアウダーであったが、

「ははッ、ははははっ」

やがて声を上げて笑い始めた。

「……いや、悪いな。ホント、お前さ、きっと大物になるわ」

そう言って、ダイの頭をガシガシと撫でまわす。

「うわっ！？　な、なにするんだよッ！！」

子供扱いするな、と頬を膨らませるダイ。その反応を見て更に笑い出すアウダー。

そんな二人を見ながら、ブラスはダイの出した答えに満足そうに頷くと「では皆の所に行こうか」と、二人を連れて歩きだした。

デルムリン島の北部、その小さな岬に立つ三つの人影。

ダイとアウダー、そしてブラスである。

体に巻きつけたベルトにありったけの魔法の筒を装備したダイは、その中の一本を取り出すと、天にかざして解放の呪文「デルパ！」を唱えた。

ポンという音と周囲に広がる眩い光。そこに現れたのは、翼を持った空飛ぶ魔物キメラであった。

「よ～しっ！　頼むぞキメラ！」

「キュイイッッ！！」

「へ～、また珍しい……魔法の筒か。実物なんて初めて見たぞ」

「こりゃ、待たんかダイッ！」

準備万端と意気込むダイに、ブラスは隠し持っていた金色に輝く“特別な”魔法の筒を取り出そうとして――その手を止めた。
大事な事を確認していなかった事に、今になって気付いたからである。

「ダイ、確認をしておくが……。お前は、あの偽物達がどこに行ったのか、知っておるのか？」

「え？　じいちゃんが知ってるんじゃないの！？」

これに慌てたのはダイである。
だって何でも知ってるじゃないかと続けるダイに、もっと勉強をさせようと心に誓うブラス。

「「……ハァ……」」

この微妙な雰囲気を破ったのは、この親子のやり取りを黙って見ていたアウダーだった。

「まあ、十中八九ロモスだな。ブラス爺さん、“キメラの翼”を持ってないか？　キメラを前に言うのも何だが」

キメラの翼とは、雷に撃たれ死んだキメラが落とした翼を、特殊な秘術を用いて加工する事で作り出される非常に希少なアイテムである。
天に向けて放り投げ、翼が地に落ちるまでに行きたい場所をイメージすれば、その場所に一瞬で移動できるという効果を持つ。
非常に便利な道具だが、キメラの数が少なくなり、その入手の困難さ、成功や失敗に関わらず一度使えば失われるアイテムである事もあって、今では一部の王族や富豪だけが手にする高級品となっている。

「む、確か……一つだけなら有ったと思うんじゃが」

「そっか。だったら、悪いけどそれを使わせてくれないか？　俺が使えばダイを連れてロモスに行ける。仮に、奴らがロモスに居なくてもアレだけ目立つ連中だ」

「え？　アウダーも手伝ってくれるの！？」

探し出すのは簡単だ、と肩をすくめて答えるアウダーに、一緒に行ってくれるんだ、と喜ぶダイ。
キメラを再び魔法の筒に戻すと「早く行こう！」とアウダーの手を取って急かし始めた。

「それはこちらとしてもありがたい話じゃが、アウダー殿は良いのですかな？　争い事は避けられぬと思うのですが」

そう言って「落ち着かんか」と、ブラスは手にした杖でダイの頭を小突く。

「それに、これはこの島の問題ですからな。遅かれ早かれ、いつか

はこのような事が起きるであろうとは思っておりました」

「殿はいらないよ。義理と人情。俺がそうしたいと思ったからそうするだけ。ブラス爺さんが気にする事はない。それに、やられたらやり返すのが俺の主義」

三倍返しは基本だろ、と怪しく笑うアウダー。

「ハ、ハハハハ……。そ、それではキメラの翼を探して来るので少し待っていて下され」

ブラスは引き攣った笑みを返す事しかできなかった。

「行ってくるよ、じいちゃん！」

「くれぐれも気を付けてな。アウダー殿、ダイを頼みます」

興奮ぎみのダイとは違い、ブラスの表情に余裕は無い。
その内に、どれほどの葛藤があるのか。
アウダーには想像もつかない事だったが、分っている事は一つある。

「ゴメちゃんとやらと一緒にダイは無事に返すよ」

ひらひらと手を振って答えると、アウダーはキメラの翼を放り投げ――ロモスへ、と念じる。
眩い光がアウダーとダイを包み込み、光の玉と化した二人は瞬く間に大空へと飛び去って行った。

「……ダイ！」

無茶だけはするなと、手にした杖を握りしめる。

そうして飛び去った二人を眺めていたブラスであったが――

「ん！？　し、しまったーーっ！！　忘れておったーーーーっ！！」

慌てて自分の部屋に戻ると、そこにはダイに渡すつもりであった金色に輝く“特別な”魔法の筒が転がっていた。

「……ま、まあ。アウダー殿もおるんじゃし……大丈夫……？」

第2話　胎動

「おおっ、勇者でろりんよ。よくぞ無事に戻ってまいった。そなたらの無事な姿を見て、このシナナ安堵したぞ」

ロモス王城――謁見の間。

ここロモス王国の国王であるシナナ王は、生来の温和な性格と気さくな雰囲気、寛大さ、その人柄と善政によって、国民に慕われて

いる。
少々間の抜けたところや、五十歳を越えてなお子供っぽい好奇心を隠そうとしないところが、側近からは苦言を呈されるところだが、かえって親しみのある王様だ、とは国民の意見である。

両脇に並ぶ家臣や兵士達を「楽にしてよい」と下がらせると、シナナは正面にかしずく四人の男女を見た。
こうして謁見の間であっても、目の前の勇者達の冒険譚を一刻も早く聞きたくてうずうずとしているのは誰の目にも明らか。
彼は、自分が国王という立場である事に不満は無く、誇りと熱意を持って善き国王足ろうとしている。
しかし、心の隅には目の前の冒険者達のように、気の向くまま自由に冒険をしてみたい、という思いがあるのも事実であった。

「さて、でろりんよ。このたびは魔物たちが巣食っているという魔の島、デルムリン島への冒険であったそうだが……」

玉座へと続く真っ赤な絨毯の上で、膝を付き頭を垂れるでろりん達。
思わず浮かぶ笑みを、必死に抑え込みながら、シナナの問いに答える。

「はっ、邪悪極まりない魔王の残党共が次から次へと襲い掛かってまいりましたが――」

そこで言葉を切り、ゆっくりと立ち上がったでろりんは両手を広げ、まるで吟遊詩人が伝説を謡う様に続ける。

「頼もしい仲間達と力を合わせ、正義のために戦う我々の前では、いかに凶悪な魔物であろうと恐れるものではありません！」

あまりにも芝居じみた行為であったが、この場では効果はてきめんであった。
周囲からの感嘆の声や、自分に向けられる尊敬の眼差しを感じるたびに、この後に見せるモノへの反応が楽しみで。
でろりんは、顔がニヤケそうになるのを必死で堪えて続ける。

「その戦いの中、一匹の珍しいモンスターを発見いたしました。殺さずに捕えてまいりましたので、王様に献上しようと思いまして」

その言葉に合わせて、ずるぼんは脇に置いていた小さな箱を、そっとでろりんに差し出す。

「そう、これが――」

その蓋を開くと共に、周囲には溢れんばかりの金色の輝きが広がった。
その神秘の光を見た人々の感動は、どれほどのものであったのか。
シナナもまた、そのあまりにも美しい輝きに見惚れてしまい、最早溜息しか出てこない。

「伝説の、幻の珍獣と呼ばれるゴールデンメタルスライムですわ」

「まさしく……生きた宝石です」

「な、なんと！　なんと素晴らしい！！　見事じゃでろりん、そなたの望むままの褒美をとらせよう！！」

沸き上がる歓声。

「でろりんこそまさに真の勇者じゃ！」

感じた喜びのままに、四人を賞賛するシナナ王。
周囲の家臣や兵士達も、次々とでろりん達に拍手と賛辞を送る。
まさしくこの世の春を謳歌するでろりん達。
彼らの目の前には王の言葉に従い、次々と運ばれてくる宝箱や金貨の輝きが溢れている。

「今宵は宴を開き、勇者達の帰還を祝おう！　そして、その席上で余は真の勇者にのみ与えられるという覇者の冠を授けるであろう！！」

――勇者様万歳！

シナナ王の宣言に沸きあがる人々。
たちまち興奮に包まれる城内。

しかし――

その歓声の中で、檻の中で捕らわれていた小さな魔物が流していた涙など、誰も気に留めることはなかった。

「……ピピピィ～～」

「うっわ～、すっげー！　本当に一瞬だった。アウダー、あれがロモスなの！？　ふえ～、人や建物があんなに！　あ、あれがお城か

～、でっかいな～」

アウダーとダイが移動した先は、ロモス王国の城下町を見渡せる小高い丘の上であった。

昼時という事もあり賑わいを見せている城下町の光景に、おのぼりさんよろしくはしゃいでしまうダイ。

「気持ちは分かるが落ち着け」

「……大丈夫。分かってる」

一転して、ダイは思い詰めたような表情となってしまう。

「気負い過ぎだ」

ダイの頭をぽんぽんと叩き「観光はお友達を助けた後にな」と、城下へと歩き出すアウダー。

「……うん！」

力強く頷いたダイは、先を行くアウダーを追って駆け出した。

（待っててよゴメちゃん、俺が必ず助けるから！）

ルイーダの酒場。

酒場と名乗っているように、基本的には夜間の営業がメインであ

る。
昼間は掃除や料理の仕込みなどで忙しく、片手間で冒険者への仕事の斡旋を行っていた程度である。
せいぜいが、常連相手に軽い食事を出すぐらいであった。

しかし、今日は特別の日。

凶悪な魔物を退治したという勇者の活躍は、城内から瞬く間に城下へと広がり、一気に国を挙げてのお祭りムードへ。
良く言えば、王家と国民の強い一体感、悪く言うならノリが良いという事か。
シナナ王もそうであるが、国民性とでも言おうか、この国の人々は他国に比べておおらかな面が目立ち、お祭り好きという一面が強かった。
兎にも角にも、そんな活気に湧くこのチャンスを逃してなるものか。
そこで、主人は酒場の開店時間を大幅に早めてみた。その結果――

「オヤジー、こっちにエール３つ！」

「お～い、ルイーダちゃん、こっちだこっち」

「何だよ何だよ、こっちが先だろ～」

「嬢ちゃん嫁に来てくれー！！」

「うるさい！　落ち着けこの酔っ払い！」

「ぎゃはははは。何だ、また怒られてるのかゴメス！」

昼食時で賑わう店内には慌ただしく動き回る姪の姿。その予想以上に活気づいた店内の様子に、俺って商才があるんじゃないかとニヤケる主人。

「勇者様ありがとう」

天に向かって感謝を述べる。

「勇者様はいいんだけどさ。アウダーはどうしたのかな？」

「んあ？　ああ、そうだなぁ」

料理を取りに来たルイーダの言葉に思い返す。

勇者様勇者様と言われてはいるが、その話の中に一緒に行っていたはずのアウダーが全く出てこない。

「ただの案内人が英雄譚に語られる事が無いのは仕方が無いんじゃねえか？」

とは言え、依頼には違いないのだから、結果報告のために顔ぐらいは見せに来てもおかしくはないのだが。

さて、と主人は顎を撫でる。

「元々、あいつは旅人だからな。あれだろ？　路銀が都合出来て、そのまま旅にでも出たって事も考えられるわな」

「そうかなぁ？　それならそれでいいんだけどさ。でも、一言ぐらいあってもいいと思わない？」

薄情な奴め、と。どこか憮然とした表情のルイーダに、本人そっ

ちのけで勝手に話を決めた事を叱られた記憶が蘇り、主人は慌てて話を変える事にした。

「ほら、早く持って行け。お客さんが待ってるんだからな」

「あ、うん。って、こらそこ！　酔っ払い！　お皿を投げるな！！」

高いんだぞ、と慌しく駆け出すルイーダ。

「……まあ、アウダーなら何があっても大丈夫だろ」

そう思う事にして主人は次の料理に取り掛かった。

「駄目だな、他の店に行こう」

宿に戻り、置いていた荷物から昼食代を確保したアウダーは「とりあえず飯を食っとくか」と、ダイを連れて馴染みと化したルイーダの酒場へと向かった。

ダイとしては、一刻も早くゴメを助けに行きたかったので、そんな暇は、と文句を言おうとしたが、運悪く腹の虫が鳴ってしまい。

慌ててアウダーを見れば、ニヤニヤと笑っている。

なんて性格の悪い大人だ、と思ったが空腹には勝てず。

そうして渋々ついて行った店の前で「ちょっと待ってろ」と、入り口の陰から不審者よろしくこそこそと店内を伺っていたアウダーの発した言葉がこれだった。

普段は暇なはずの時間帯なのに、どうにも慌しく忙しそうで。
こんな時に店内に入ろうものならあの主人の事、きっと自分を従業員のように扱き使うハズだとアウダーは回れ右を選択する。

「右に回りますか、はい、だ」

「え～、なんでだよ？　いいじゃん、いい匂いもしてるよ！」

漂う料理の匂いに、鼻をひくひくとさせながら文句を言い出すダイ。
何だかんだ言いながらも育ち盛りである。食べる気満々であった。

「……おいコラ」

お前はさっき何と言った、と突っ込みを入れようかと思ったが、大人気ないと考えて、アウダーは話を逸らす事にした。

「ゲフンゲフン。いや、どうにも満席みたいだ。この通りをもう少し先に行けば、別の店がある。そこにしよう。そうしよう」

「あ、待ってよ！」

（しっかし、何だってんだか。この感じは）

何やら非常に浮ついた雰囲気の城下。
そこかしこで交わされる人々の会話に耳を傾ければお祭りだの勇者様だの。

「……面倒な事になりそうだ」

そう呟いたアウダーの言葉は「早く行こう！」と急かすダイには聞こえていなかった。

ロモス王国の南東部には、巨大な森がある。
過去、何人もの人間がこの森へと入り、無事に森を抜けた者、戻ってきた者は数少ない。
日の光を遮るかのように並び立つ無数の大樹。
昼間であっても光の差さないその地に、鬱蒼と覆い茂る草木は人々に不安と恐怖を与え、そこに棲む無数の魔物の存在もあって、いつしか人々はこの森を“迷いの森”と呼ぶようになった。
今では近隣の村に住む住民達や、一部の人間を除いて、進んでこの場所へ近づこうとする者はいない。

この森に棲む魔物に対して幾度か討伐隊を求める声も上がったが、そこに棲む魔物が森を出て人々を襲う事は稀であったため、王家はその対応を監視の強化と国民への注意を促す程度に留めていた。
魔王ハドラーの起こした戦乱により多くの兵の命が失われた事で、新たに再編された兵団には若年の者が目立ち、討伐隊を組めるほどの余裕も無ければ、近隣の村々へ配備する兵力も足りなかった。これはロモス以外の国にも言える事であったが、それが実情であった。

そんな迷いの森の奥深くに、人知れず造られた洞窟があった。
咆哮を上げる巨大な魔物の顔を思わせる入り口を構えた不気味な洞窟である。

「ふん、あのような奴が“獣王”を名乗るだと……」

その奥深く、暗闇の中で蠢く巨大な影。
影は洞窟の外へと向かい、ゆっくりと動き出す。
そして、差し込む僅かな光にその影の姿が露になった。

丸太のような巨大な四肢を持った牛頭の、伝説にあるミノタウロスを思わせる巨漢の魔物。
全身を覆うプレーメイルが、日の光を反射して不気味に輝いていた。
右手に身の丈はある巨大な戦斧を持ち、左手には一つ目の魔物“悪魔の目玉”が握られている。

「見くびりおって……百獣魔団を統べるのはこの俺様こそが、百獣将軍ザングレイこそ――ふさわしい！！」

苛立ちと共に、悪魔の目玉を地面に叩きつけ、手にした巨大な戦斧を力任せに振るう。
その巨腕によって巻き起こされた風圧に、周辺の木々が次々と砕けへし折れていく。
その光景に満足したのか、落ち着きを取り戻したザングレイは、手にした戦斧を足元に転がる瀕死の悪魔の目玉に叩きつけると止めを刺す。

「手緩いのだ。人間などに何を恐れるものがあるか。時間など与えずにさっさと叩き潰してしまえばいい」

これから始まる事を想像し、愉悦に歪められたその表情は――邪悪。

「手柄だ。手柄さえ立ててしまえば誰も文句は言わん」

ザングレイが視線を向けた先、その方向には活気に賑わうロモス城があった。

御前試合

「どうして分かってくれないんだろう……」

宿の窓から見える町の光景、そこで賑わう人々の姿に反して、それを眺めるダイの表情からは昼間の明るさが影を潜めていた。

ただ、悲しい。

この城下町全体に広がる賑わいの原因を知ってしまったダイに浮かれる事など出来るはずが無かった。

デルムリン島の凶悪な魔物を成敗し、希少な魔物を捕らえて戻った勇者を称えるために、今宵国を挙げての大がかりな宴が開かれるという。

昼食を取るために立ち寄った食堂で、その話を聞いた時、思わずダイは叫んでいた。

『あいつらは勇者様なんかじゃない！』

どうして皆が悪者にされてしまうのか。何も悪い事なんてしていない。それに――

「あいつらはゴメちゃんを連れ去った！　勇者様を語る偽者なのに……」

「お前も、あいつらを勇者だと勘違いしたんだろう？　つまりは、そーゆーこった」

ダイの呟きに答えたのは、両手に持ったトレーの上に食事を乗せてやって来たアウダーだった。

「ほれ、お前の分」

「……うん、ありがとう」

食堂でのダイの発言は、勇者様と盛り上がっていた周りの客達に冷水を浴びせた様なもの。

とても落ち着いて昼食をとれる様な雰囲気ではなくなってしまったのだ。

アウダーはダイを連れて自分が泊っていた宿へと場所を移していた。

ベッドに腰かけ、沈んだ様子で黙々と食事をするダイ。

（空気読め、ってのも……無理な話だわな）

アウダーがブラスから聞いたところでは、ダイはまだ十二歳ぐらい。普通であれば、まだまだ遊び盛りである。

逆に、これぐらいの歳で周りの空気を読む事に長けていれば、それはそれで嫌な子供だ、とも思う。

これが子供を心配する父親の気分か、とも思ったが、逆算すれば九歳差。あり得なくもないが、お兄さんが妥当か、と考え直す。

「いや、そんな事はどうでもいい。ダイ、食いながらでいい。ちょいと確認しておきたい事がある」

「え？」

「お前、俺がいなかったら“ゴメちゃん”だったか？　どうやって助ける気だったんだ？」

その質問に、ダイは食事の手を止めて考え始めた。

「ん～。最初はさ、島の皆の力を借りて、あの偽物達をやっつけてゴメちゃんを取り戻そう、って考えてたんだけど」

それができれば一番手っ取り早かったのだが、今となってはゴメちゃんは国王の元に、偽物達はお城の中。

「だから……夜にでもお城に忍び込んで――って、アウダー？」

「……分かった。もういい」

ひょっとしたらと、淡い期待を込めて聞いてみたが、どうやらダイも行き当たりばったり――しかも過激派だったと分かり、眉間を抑えるアウダー。

「お前はその歳で手配書に載るつもりか」

「……何だよ、だったらアウダーには何か良い手があるの？」

「まあ、あるっちゃある。でもな、そのプランAは、できれば使いたくない手だし時間もかかる。そこで、プランBを考えたんだが……」

そう言うと、アウダーは懐から一枚の紙を取り出してダイに渡した。

「ナイスなタイミングだったよ。事が上手く進めば、王様に直談判だってできる。したかないが。そこでだ、そのゴメちゃんってのと、

お前は親友なんだよな？　意思の疎通はできてるのか？」

「そりゃあそうさ。おれとゴメちゃんは小さい頃からずっと一緒だったんだ」

ゴメちゃんだけじゃない、島の皆だってそうだ。

用紙を食い入るように見つめながら、誇らしげに語るダイ。だったらイケるかと、アウダーはプランBを実行する事に決めた。

「よし。ならプランBで行く。さっさとメシを食って出かけるぞ――って、まだ見てるのか？」

食事に手も付けず、難しい表情のまま、じっと用紙を見つめ続けているダイ。

何か問題でもあったのか、そう尋ねようとしたアウダーに、ダイはそっと用紙を差し出すと、ただ一言だけを告げた。

「字読めない」

「……これが終わったら教えてやろうか？」

「勉強嫌い」

アウダー　の　こうげき
＞
でこぴん　れんだ
ウメボシ　の　けい
ななねんごろし

ダイ　は　ないてあやまった！

第３話　御前試合

シナナ王の冒険者好きは周辺国に広まっている程に有名である。
彼らの語る冒険譚に一喜一憂し、成果を挙げた者には惜しみない賛辞を与え。
場合によっては、彼らの活動を援助する事すらあった。
そして、もう一つ。
シナナ王はツワモノ達が大好きであった。
それは、彼の代で、城下町の外れに闘技場を建造した事からもうかがえる。

「王様の思い付きとかでな、ちょくちょく武術大会ってのが開かれるんだと」

大通りを外れ、闘技場へと向かう道には、今日は多くの人々が行き交っている。
その人波の中を、アウダーはダイにプランＢの説明をしながら歩

いていた。

「で、だ。それが今日、急遽開かれる事になった。優勝者には賞金一万ゴールド。賞金の額としては少ないが、急に決まった大会だからな。ま、こんなモンだろ」

「あのさ、それとゴメちゃんを助けるのにどんな関係があるの？」

「今回の大会のお題目は、危険極まる怪物島から神秘の珍獣を捕らえた勇者様にあやかって、だと。多分、お前のお友達のお披露目も兼ねてるな」

偉い人の考えってな分かんねえなとアウダーがぼやく。

「ゴメちゃんが！？」

身を乗り出したダイを軽く制して続ける。

「落ち着けよ。話を戻すぞ。副賞の方も面白くてな、俺としてはこっちがおいしいんだが……勇者様直々のご指導をして頂けるんだと。そして、賞金を渡す時には、王様自身が選手に直接手渡しするんだそうだ」

危険を冒してまで、お城に忍び込む必要はないって事だな、とアウダーは続けた。

「……へ？　それって！？」

「つまり、優勝すればご指導の名目であいつ等を引っ張り出せる。そして王様にも直接事情を説明する機会を得られる。そうなれば、

あいつらは勇者様から一転してただの強盗だ。証拠云々を言い出だしやがったらお前の出番だ。……クックック」

驚くぜあいつらと、そう言ったアウダーの目は完全に座っていた。

「……怖いよアウダー」

どう見ても悪者の雰囲気である。

ダイにしてみればゴメの救出こそが第一であり、偽者達への仕置きは二の次であったのだが。許す許さないは別としても、さすがにアウダーの様子を見て偽者達の末路が哀れに思えてきた。

「大声でお友達の名を呼んでやれ。嘘かどうかは、それで分かるだろ？」

二人が到着したのは受付終了の寸前であった。予想よりも多く出場者が集まったので早めに打ち切ろうとしていたらしい。

「只今を持ちまして受付を終了致します！」

どうにか間に合ったものの、直に試合が始まるとの事。

「じゃ、手筈通りにな。観客席で大人しく見ていろよ？」

そうダイに告げると、アウダーは急ぎ控室へと向かって行く。

その子脇には、ここに来る途中で買った荷物が抱えられていた。

登録には偽名を使い、試合では変装もするとの事。
本名を名乗って偽物達に警戒されたくない、との事だったが、商店で品を選んでいた時のアウダーの様子を思い出したダイには随分とノリノリに見えた。

「大丈夫かな？」

やはり自分の手でという思いは消せず、ダイも出場しようとしたのだが結果は不可。
受付の担当者が見たところ、同年代の子らに比べて鍛えている様だが、誰がどう見ても子供である。
シナナ王は純粋に戦いを通じて切磋琢磨するツワモノ達の姿が観たいのであって、血生臭い殺し合いを観たいわけではない。
そのため、出場の際には幾つもの規定が設けられていたのだが、ダイはその一つである年齢制限に引っ掛かったのである。
例外として、シナナ自身が力量を認めて許可を出せば子供でも出場は可能であったが今回ばかりはどうしようもない。

「ちぇっ。なんだよ、子供子供って。でも――」

子供扱いされるのは嬉しくないが、今回に限っては良しとしよう。
小柄な体格を生かし、人混みの間を器用にすり抜ける。
それを続けてどうにか最前列に近い場所に辿り着いたダイは、この時に限っては自分が小柄な子供である事に感謝した。

円形に形作られた石畳の舞台の上では、今は魔法使いと戦士が戦っている。
火炎呪文（メラ）の炎を掻い潜り、手にした棍棒の一撃を繰り出す戦士。
その攻撃を読んでいたのか、危な気なくその一撃を避けた魔法使いが幻惑呪文（マヌーサ）を唱えて、戦士の動きをかく乱する。

「うひゃー、すっごいなー！　って、駄目だ駄目だ！！」

思わずその戦いに見とれてしまったダイであったが、目的を思い出して会場全体に目を向ける。

「……あそこかな」

すると、見晴らしの良い場所に造られた、いかにもな特等席に、温厚そうな恰幅の良い男性と、その脇に控える兵士達の姿が確認できた。

きっとあれが王様なのだろう。ならゴメちゃんはどこにと、目を凝らして見るが、それらしい姿は見付けられない。偽物達の姿も。

こうなると、アウダーの言っていたプランBが途端に疑わしくなってくる。

お城に忍び込んだ方が良かったのではないか、使いたくない手と言っていたが、そちらの方が確実だったのではないのか、と。

「そもそも、優勝できるのかな？」

そして、ダイの最大の懸念はこれだった。

プランBはアウダーが優勝する事が前提。

確かに、自分の全力の一撃を、片手で受け止められるほどには強いのだろうが、実際にアウダーの戦いを見た事は無い。

あの時にしても、直後に見たのは足を押さえて蹲った姿だ。

舞台では小柄な武道家が大柄な男を場外へ蹴り飛ばして勝ち名乗りを受けている。

『急に決まった大会だからな、出場する奴なんて地元の力自慢ぐら

いだろ？　大丈夫大丈夫、まっかせなさい』

ひらひらと手を振りながら、行ってくるぜ～、と軽い調子で控室へと向かったアウダーの姿を思い出し、ダイは思った。

「……駄目かもしれない」

それは、小さな呟きであったのだが、隣にいた青年には聞こえていたようだ。

その不安げな様子が気になったのであろうか。

「君の知り合いも出場しているのかな？」

「え？　あ、ハ、はい！」

見知らぬ相手に突然話しかけられた事で、ダイは思わず上ずった声を出してしまう。

その恥ずかしさで赤面するダイ。

「ああ、すまないね。驚かせたかな？」

青年は謝罪すると、その視線を舞台の上へと向けた。

「私の知り合いも出場していてね。全く、少しは自分の立場と言うモノを自覚して欲しいのだが」

やれやれと、肩を竦めた青年の視線を追えば、舞台の上にはアイマスクを付けた栗色の髪の少女と覆面マントで全身を覆ったいかに

も怪しい男が対峙していた。
何やら言い争っているのか。
両手で自分の身体を抱きしめる少女と、両手をワキワキと怪しく動かす覆面男。

『さあ、この試合が予選最終戦となります。本大会の紅一点！　え～、「愛と正義と勇気の使者、水と知性の美少女戦士セーラーレオナ！」……きわどい衣装がドキドキだー！！』

「……レオナ様……」

そのアナウンスに、思わずこめかみを押さえて苦悩する青年。

『対するは、「世界の美女は俺のモノ、文句ある奴ァかかってこい！　世紀の恋泥棒カンダタ！！」……おおーっと、会場中から大ブーイングです！　私としては、セーラーレオナに一言イヤンとでも言わせてくれればオッケーです！！』

カンダタとは、ダイが事前にアウダーから教えられていた偽名であった。
どのような変装で登場するのかと思えば、不審者以外の何物でもない姿。
おまけに何なのだろう、恋泥棒とは。意味が分からない。

「……やっぱり駄目だ……」

何やってるんだよ、アウダー。
情けな過ぎても涙が出る事を、ダイは十二歳の若さで知った。
ダイは、大人の階段を一つ上った。

ちなみに、この試合の勝者はアウダーであった。
セーラーレオナがイヤンと言ったのかどうかは、彼女のプライバシーのため、彼が一部の観客から熱狂と共にその勝利を称えられた事から察して頂きたい。
ただ、舞台に多大なる被害の爪痕が残された事を記しておく。

さて、急遽開催されたわりに、出場選手のレベルは高かったのだが、人数という点ではそれ程でもなく。
相手をおちょくるような、ぐだぐだの戦いを見せて勝ち進んだアウダーは、早くも準決勝に進出となった。

待ち人であったセーラーレオナが敗退した時点で、青年――バロンが観客席に居る意味は無くなったのだが、心の傷が大きかったのか、試合が終わっても彼女はまだここには来ない。
試合が終わるまで待っていろと言われていたバロンは、ならばとこのまま試合を観戦する事にしていた。
彼女の立場を考えれば、試合中の出来事とはいえ、あのような目にあわせたカンダタなる者を許すわけにはいかないのだが。
隣にいる少年の漏らした名前と、先程のふざけた試合内容から、カンダタの中の人の正体に気付いたバロンは、この事について考える事を放棄した。
自分は出場する事を止めた。聞かなかったのはレオナであるし、試合中に調子に乗ったのはあの馬鹿だ。
どちらも自業自得、後は当人同士で何とかしてくれ、と言うのがバロンの偽らざる本音だった。
彼女と“悪友”のいざこざに、毎度の如く巻き込まれるのだけはもう勘弁して欲しかったのだ。
隣に座る少年も「……大人って……」と呟きながら頭を押さえて

いる。
君も苦労してるんだなと、微妙な親近感を覚えたが、それよりもバロンには気になる事があった。

『さあ、皆さま！　今回の武術大会もいよいよ大詰め、準決勝です！！』

ロモス王が、勇者なる者達を誇らしげに紹介しているが、彼らには正直興味は無い。
また、ゴールデンメタルスライムなる希少なモンスターを、皆の前に紹介しているがこれも同じ。
隣に座る少年が、それを見て「ゴメちゃんッ！」と叫んだのも気にはなったが、もっと興味を引かれる者がいたのだ。

『この四名、いずれも劣らぬ強豪ばかり！』

――パワー&テクニック！！　格闘士ゴメス！

――旋風の如き剣の使い手！騎士バロリア！

――強いのか弱いのか！？　覆面マントの怪人カンダタ！

そう、その名は――

『立ち塞がった相手は全てが一撃、全てが秒殺！！　圧倒的な強さを見せた無名の剣士！』

――戦士ヒュンケル！

試し合い

これまでトーナメント形式で行われていた各試合であったが、急遽準決勝での対戦相手は抽選によって決定される事となった。
運営側としては、これまでの試合で損傷した舞台の修繕を行うための時間稼ぎであったのだが、この展開は観客達に好意的に受け止められている。

「次の大会からも取り入れようかの」

このシナナ何気ない一言で、次の大会からは準決勝で一度対戦相手の組み換えを行うというイベントが追加される事が決定した。

さて、その抽選の結果である。
第一試合はゴメス対バロリア、第二試合がカンダタ（アウダー）対ヒュンケルとなった。

「舞台の修繕が終わるまで、各選手には一度休憩に入って頂きます」

「それって、終わるのにどれくらい掛かりそう？」

「そうですね、十五分から二十分もあれば終わるかと」

「そこから一試合か。結構な時間だな」

折角空いた時間である。ならばと、アウダーはこの時間を使って“おかんむりなお姫様”のご機嫌を取っておく事に決めた。
レオナとは実に数年振りの再会だったが、まあ随分と成長したもんだと、先の試合でのアレやらコレやらを思い浮かべる。

幸いにも覆面のおかげか、係員達からは次の試合に備えて集中しているようにしか見えていない。
もっとも、先の試合の内容が内容なだけに、あえてこの怪しい覆面男に話しかけるような係員はいなかった。

「……逝くか……」

アウダーは人体の神秘、月日の流れってすげーなと感心しながら、鬼が待つであろう控室へと向かうことにした。
係員達は皆作業に駆り出されているのか、通路には他に人影は見当たらない。

「ああそうだ。そろそろメルルに手紙でも書くか」

レオナの成長のついでという訳でもなかったが、アウダーは最近全く連絡を取っていない祖母と妹の事を思い出す。
この薄情者が、と眦を釣り上げるナバラの姿が容易に想像できて少しへこむ。

「……今更って感じもするしなぁ。お元気ですか、ってのもなんだかなぁ」

そんな風にとりとめの無い事を考えていた為か。
通路を右へ曲がろうとしたその時、アウダーは死角から出てきた人影に気付くのが遅れてしまった。

「あ！？」

咄嗟の事であったが身体が反応した。
倒れこむように重心を左へと傾けながら、右足で通路の壁を蹴り

つける。
ゴッという音の後には、何事もなかったかのようにその場に立つ若い男と、向こう側の壁に背中からへばり付いたアウダー。
「ああ、悪……いや、すいません、ぼうっとしていました」
「……いや」
自分の不注意だった事もあり、アウダーは口調を変えて頭を下げた。相手を見れは、少しくすんだ銀髪の鋭い眼つきをした青年だった。
落ち着いた佇まいでありながら、どこか刃物の鋭さを感じさせる特徴的な雰囲気に、確かヒュンケルと言う名だったかとアウダーは思い出す。
（まるで剣だな。鞘に収めてはいるがいつでも抜ける、って感じの）
試合を観戦していた時から頭一つ飛び抜けた相手だとは思っていたが、こうして間近で相対して判る事もある。
明らかに他の参加者とは頭一つどころではない、レベルが違う、と。
「ええっと、確かヒュンケルさんでしたっけ？　次の試合の」
「……ああ」
それだけであった。
他には特に何を言うでもなく。
ただじっと、ヒュンケルはその鋭い視線をアウダーに向けている。
はっきり言って辛い。間が持たない。ぶっちゃけてしまうと視線

が怖い。
そんなに怒らせるような事をしたか、と内心焦るアウダーであったが心当たりは特にない。
「……ひょっとしてセーラーレオナ関係の方？」
あるとすればこれぐらいだったのだが、ヒュンケルからは特に反応はない。
さてどうするかと視線を泳がせるアウダー。
そこでふと目を引いたのは、無骨と言うべきか不気味と言うべきか、ヒュンケルの肩から鎖で吊り下げられた巨大な剣であった。
正しくは、巨大な鞘に納められた剣である。
目立つ事この上ないのに今の今まで気が付かなかったのは、それだけヒュンケル自身の存在感が大きかったためか。
「魔剣か何か……か？　随分と物々しいと言うか禍々しいと――って違う違う！　いやー素敵な剣ですね！」
思わず口に出てしまった本音を必死に誤魔化そうとするアウダー。
これまでヒュンケルが行った試合では、彼は全て徒手空拳のままで勝利していた。
ここで下手に怒らせでもして、こんな見るからに物騒な魔剣なんて使われてはたまらない。見苦しいまでに必死であった。
誰だ、ご近所力自慢大会なんて言ったのは、と。あの時の自分を殴ってやりたくなった程である。
「うん。お互い怪我をしないように、くれぐれも、気を付けて、空気を読みつつ、穏やかに頑張ろう！」
これはプランＣかＤが必要になりそうだと、アウダーは計画の変

更を考慮し始めた。
思った以上に時間を食った事もあり、そろそろ“おかんむりな姫”から“怒れる鬼姫”にレベルアップしたかもしれないレオナの元へと向かうべく回れ右。
遠回りになるが、一刻も早くこの微妙に緊張した空気から逃れたかったのだ。

「……本気ではなかった、そう言う事か」

「はい？」

突然の事であった。
今まで相づち程度の反応しか返さなかったヒュンケルが初めて発した言葉である。
何かあるのかとアウダーが振り返ろうとして――

『……らう』

首筋に走るチリチリとした感覚に従いその場から飛び退いた。

ザッと、何かが切り裂かれる音。
通路の小窓から差し込む光に照らされて輝く刀身。
二人の間にゆっくりと落ちる切り裂かれたアウダーのマント。

素早く体制を立て直したアウダーは、腰に差した剣に触れながらヒュンケルを睨みつけた。
直前に、ヒュンケルが何かを言っていたようだがそんな事はもはやどうでもいい。

「……どういうつもりだこの野郎」

「気配を感じ今のを避ける、か。成程、やはりただの道化ではない」

「聞けよ人の話」

ヒュンケルはそれには答えず、抜き放った剣の切っ先をアウダーに突き付ける。

その表情が、なぜか微妙に楽しそうにアウダーには見えた。

（ドSか、この野郎）

喉元まで出かかった言葉を何とか堪える。

「あのな、こんな狭いトコでおっ始めんでもしばらくすれば試合でやり合うってコト分ってる？　場外乱闘は失格なんだぜ？」

軽口を叩きつつも、アウダーは咄嗟に飛び退いた分だけ開いてしまった間合いを確認する。

互いに一歩踏み込んだとしても、おそらくは後一歩足りない、といったところか。

二歩踏み込み先を取るか、一歩に留めて後の先を取るか。

相手は既に抜き身、こちらの剣は鞘の中。

（……って、何でやり合う気になってんだ俺。あいつの事情は知らないが、俺にはこんな場所でやり合う理由は――）

「――あるな」

いきなり斬りつけられて、それを笑って済ませられるほど人間ができているとは思っていない。

いっそ大声でも出して人を集めてヒュンケルを失格にしてやろうかとも考える。

「構わんさ。ここで確認できるのであればな。この後の試合にはもう拘るほどの意味は無くなった」

「構わんって、おいおいマジですかこの野郎」

「……フッ。ああ、マジだ」

その瞬間、アウダーはヒュンケルが確かに微笑んだのを見た。
そして、自分の想定が甘かった事を痛感した。

「ッ！？　早ッ――」

仮定していた互いの一歩。
ヒュンケルの踏み込みは、その前提を無意味にした。
既にヒュンケルは間合いの中。諸手の上段。
最早、後の先だの何だのと言っている余裕はない。
反撃――無理。
避ける――無理。
ならば――と、袈裟がけに振り下ろされる刃を、逆手で鞘ごと引き抜いた剣で受け止める。
ガギンという甲高い音と共に左腕に奔る衝撃。
ただの一撃で左腕と剣が死んだが想定内。

「らあッ！」

打ち合った互いの剣を支点として、アウダーは勢いのままに身体を流すと、握りしめた右拳を体勢の崩れたヒュンケル目掛けて突き

出した。
この一撃で倒せるとは思っていない。
ただ、少なくとも仕切り直す程度の余裕は出来るとアウダーは考えていた。
だが――
「……嬉しそうだなオイ」
「そうか？」
「鏡見ろ鏡」
眼前の相手を打ち抜くはずの拳は、そのヒュンケルの左手に受け止められていた。
剣を持ったアウダーの左手は痺れたまま動かない。
右手はヒュンケルの左手で掌握されている。
そのヒュンケルの右手には剣が握られ、振るも払うも思うがまま。
こうなってしまっては、誰が見ても勝敗は明らかである。
「……はぁ……。で？　何が目的なわけ？」
観念した、と言うよりも自棄になったと言うべきか。
ヒュンケルがアウダーの右手を離すと、アウダーは溜息を吐いてその場に座り込んだ。
たった今、この場で斬り合いをやらかしていたとは思えないほどのだらけっぷりである。
「全力かどうかは知らないが、少なくとも殺る気ではなかっただろ」

「どうしてそう思う？」

ヒュンケルは剣を鞘に収めながら問い返す。

アウダーはヒュンケルの雰囲気が、僅かではあるが和らいでいる様に感じていた。

「露骨な不意打ちもそうだがあの上段だ。あそこで突きなら終わってた」

ゆっくりとだが、痺れが抜け始めた左腕をさすりながら答える。

「……そうか」

そう呟いたヒュンケルは確かに嬉しそうであった。

表情に出ている訳では無く雰囲気が、である。

例えるならば、提出した課題で満点を取った生徒を褒める教師と言った感じであろうか。

ふと、アウダーは教師と言えばあの師弟は今頃何をしているのかねと、どうでもいい事を考える。

「あ～あ、負けだ負け。もう次の試合はする意味が無くなっちまったな」

握り、開き。

左腕の感覚が戻っている事を確認しながら立ちあがったアウダーは、そう言ってその場から立ち去ろうとして――

「所詮不意打ちにしか過ぎん」

ヒュンケルの言葉に足を止めた。

「真面目に戦う気となったお前と手合わせをしてみたい。目的と言ったな？　ならば次の試合で答えよう」

「……意外と勿体ぶるヤツなのな、お前って。そう言われると――気になって仕方がない。負けても文句言うなよ」

「期待しよう」

それに応えるかのように、アウダーは右手を上げてひらひらと振ってみせた。

「カンダタ、と言ったか。あの男……」

アウダーの姿が通路の奥へと消えた頃、ヒュンケルは己の左手を見つめていた。

未だ痺れの残るその感触に、思わず笑みを浮かべる。

自分の持つ剣を魔剣と見抜いたのは、武器に対して多少見る目があれば分かる事。それは驚愕には値しない。

注目したのは通路の角でぶつかりかけた瞬間に見せたあの動き。

偶然で出来る動きではない。

しかし、偶然かもしれない。

だから試してみたくなった。

乱暴な手段であった事は認めるが、収穫は大きい。

『それでは、両選手入場です！』

歓声が聞こえる。

まだ多少の時間はあったと思うが、どうやら少し早めに試合が始まるようだ。

確かゴメスという巨漢と疾風と称される騎士の試合だったと思い出す。

「組技を重視したレスリングか。対人技術として興味深い」

準決勝第一試合開始。舞台では、ゴメスとバロリアの試合が始まっていた。

第４話　試し合い

「そんな小娘の言う事を信じるとおっしゃるのですか、王よ！」

「そ、そうですわ！　私達はこの国の人達の事を思ってあの危険極まりない怪物島へ赴いたのですよ！！　そんなどこの誰とも知れない小娘の言う事なんて！」

「言ってくれるわね～、まあいいわ。それなら、貴方達は彼を見て

もそんな事を言えるのかしら？」

「彼……だと……？　まさか！？」

「ゴメちゃんを返してもらうぞ！　偽物め！！」

ゴメスが繰り出した必殺技“双腕螺旋独楽”が、振り下ろされた騎士バロリアの剣を打ち砕く。

その光景に観客達が沸き上がる中で、でろりんはこの場をどうやって切り抜けるかを考えていた。

所詮は地元の力自慢大会だと、高をくくっていたのはアウダーだけでなく、でろりん達も同様の事。

自分達がいわゆる小物、小悪党だという自覚はあったが、それでも並の冒険者達よりも腕は立つという自負はあった。

伊達や酔狂で冒険者をやっているわけでは無いのだ、と。

だからこそ、優勝者への副賞“勇者直々の指導”の件を受け入れたし、こうして堂々と観衆の前に出る事も決めた。

それが過ちだったのか。

調子に乗り過ぎていたのか。自重するべきだったのか。

『準決勝第一試合、その勝者はゴメス！！』

興奮に沸き立つ観客達の歓声が、今となっては遠くに聞こえる。

思えば、万事が旨く行き過ぎていたのだ。

「あ、そうそう。こう見えてもね、一応あたしって王女なの。パプニカの。ごめんね～、タダの小娘じゃなくって」

ニヤリ、と意地悪く笑う少女。

「な、なぁあああああ！？」

でろりんの横では顔を真っ青にしたずるぼん達が、三人抱き合うようにして震えていた。

「ね、ね、バロン。あたし小娘って言われちゃったわ。失礼な話よね～」

「……自重なさい。全く」

「これは、どう言う事かの。説明をしてもらえるか、でろりんよ」

勇者様と呼ばれ調子に乗ってしまっていた。舞い上がっていた。
さっさと貰うモノを貰ってとんずらしておけば良かったのだ。
でろりんがどれだけ思ったところで、現実は変わらない。

「ゴメちゃーん！！」

「ピピピィーッ！！」

「へ～っ、ホントにモンスターと友達なのねキミ。こういう事ってあるんだ～」

「人間と同じですよレオナ様。魔物とは言え全てが悪、というモノでもありません。この辺りの成り立ちは以前お教えしたかと思いますが」

「そう？　あ、ほら、次の試合よ。アウダーが出てきた」

どこからだ、一体何処からおかしくなったのだろう。
試合の最中、この貴賓席に突如現れたた少女のせいなのか？
デルムリン島で会った小僧――ダイと、共に現れたこの長髪の男のせいなのか？
そもそも、どうしてあの小僧がここにいるのか？
一つに纏まらない思考に、ぐにゃりと歪む視界。
涙を流してダイの元へと飛び込むゴールデンメタルスライムを呆然と眺めながら、でろりんは膝をつき頭を垂れた。

「説明してもらおうかの、でろりんよ」

周りを兵士達に囲まれて、逃げる事も出来なくなったでろりん達。

「……はい……」

シナナ王に促されると、ゆっくりとではあったがこれまでの経緯を、デルムリン島での出来事を語り始めた。
報酬に目がくらんだ事、ダイを騙した事、デルムリン島の魔物達は凶悪な魔物などでは無かった事。
そうして、でろりんがその全てを語り終えた時、シナナ王は眉間にしわを寄せながら、ひどく疲れた様子で溜息を一つ吐いた。

「……それでは、そなたらだけを責めるわけにはいくまい。物珍しさ、心躍るような冒険譚が聞きたいが故にあの手配書を出したのはこのシナナ。金が人の目を曇らせる事を知っていながら、まったく浅はかよな」

そう言って、シナナ王はダイの前へ立つと、その膝を折った。
一介の子供を前に王が膝を着く。その光景に、周囲の兵士や家臣達がざわめく。

その喧騒を一喝して黙らせると、シナナは今回の一連の騒動の全ての責は自分にあるとしてダイやゴメに頭を下げて詫びた。

「あっちは何とかなりそうだな。あとで礼を言っておくか」

アウダーが優勝出来なかった場合を想定して備えたのがプランC“騒ぎを起こしてその間にやってやれ”である。

ダイが当初考えていた物と同じ力業であり、失敗すれば人生がゲームオーバーという実にハイリスクなものであった。

ヒュンケルの存在によってこれを実行するのもやむなしかと思った時、そこで思い付いたのがプランAの変法であるプランD“他力本願大作戦”。

つまり、レオナの立場を利用して彼女にダイを連れて直接ロモス王と話を付けてもらえば俺は楽ができる、という実に素晴らしいモノであった。

どうしてここに、海を隔てた向こうの国、パプニカの王女がいるのかはこの際問題ではない。この幸運を、日頃の行いの賜物だと思う事にする。

彼女の性格からして、真実を話せばノリノリでやってくれるであろう事は容易に想像できた。

一杯食わせてくれたでろりん達に物理的な報復が行えなくなったのは残念であったが、現状でこれ以上の代案は思いつかないのでは仕方が無い。

あとは成り行きに任せるだけだと思う事にして、アウダーはこれから迎えるヒュンケルとの試合に意識を集中させる事にした。

『カンダタ選手、ヒュンケル選手、舞台へ！』

そのアナウンスに従い舞台へと上がる。

「来たか」

ヒュンケルは剣を抜き放ち、魔剣の鞘を舞台に突き立てると静かに開始の合図を待つ。

「負けっぱなしってのも悔しいからな」

アウダーは覆面マントに手を伸ばすと、高かったんだよなコレ、と呟きながら足下へと脱ぎ捨てた。

「……若いな」

その素顔を見たヒュンケルが、少し意外そうに呟いた。

「歳は同じぐらいだろ？」

お互い様だ。そう言って腰に差した剣へと手を伸ばす。

『それでは、只今より準決勝第二試合――』

「これで勝った方が2ポイントってのはどうだ？　ちなみにさっきのは1ポイント」

「フッ、いいだろう」

『始めッ！！』

開始の合図と共に、ヒュンケルが踏み込もうとした時であった。

突如、黒い影がヒュンケルの目前に広がり視界を覆う。
それが何かと理解するより早く、閃光が影を貫いた。
反射的に身体を逸らす。
閃光がヒュンケルの肩を掠めて舞台へと突き刺さる。

「閃熱呪文(ギラ)か！」

「避けるかよ！」

風穴を開けて燃え上がる覆面マントの向こうでは、ヒュンケルに向けてその手をかざすアウダーの姿。

「魔法使いか！」

「閃熱呪文(ギラ)！」

続けて放たれる閃光。
しかし――

「甘い」

出所さえ分ってしまえば、直線の攻撃であるギラを避ける事はヒュンケルにとっては造作もない。
矢継ぎ早に放たれる閃光の間をすり抜けると、たちまちの内にその間合いを詰めて見せた。
そうしていよいよ自分の間合いとなったところで――ヒュンケルはアウダーが笑っている事に気が付いた。

「お前もな――ボミオス」

その瞬間、ヒュンケルは全身に叩きつけられるような圧迫感を感じ、踏み込みの勢いを失ってしまう。

「ッ！？　……これは……」

「加圧呪文（ボミオス）。足止めぐらいにしか使い道が無い、ってんで廃れた呪文なんだが――効果はあったな！」

アウダーは、ここぞとばかりに動きの鈍ったヒュンケルを攻め立てた。

頭部目掛けて放たれたアウダーの回し蹴り。身体の違和感に慣れないヒュンケルの髪をかすめる。

ガラ空きの背中を見せる形となったアウダーへ、逃さぬとばかりにヒュンケルが刺突を繰り出す。

その一撃を、アウダーは体勢が崩れる流れに逆らわず、そのまましゃがみ込むことで回避した。

お返しにと、背後に立つヒュンケルの足首を刈り取る勢いで足払いを仕掛けたアウダーだが、バックステップで回避される。

舌打ちと共にその場から飛び退いたが、ヒュンケルはそこで追撃はせず、アウダーが体勢を整えるのを待っていた。

「……効いてない？」

「いや、効いているさ。戸惑いこそしたが――慣れた」

「……慣れるとかそーゆー問題じゃないんだけどな」

開始の合図から僅かな時間。その間に繰り広げられたこの一連の

流れを食い入るように見つめていた観客達から盛大なまでの歓声が上がる。
それは貴賓席から観戦していたダイ達も同じ。
でろりん達に至っては、口を開けたまま呆然としている。
そんな皆に共通する感情は、ただただ驚愕と感嘆の念であった。
「相変わらず、だな。やる事がセコイと言うかいやらしいと言うか」
そんな中で、バロンだけは渋い表情で試合を観ている。
「ちょっと、一人だけ分ってるような顔をしてないでちゃんと説明をしなさいよ」
そのどこか呆れを含んだ様子の呟きに、ムッとした様子でレオナが反応した。
ダイは頭の上にゴメを乗せ、シナナの横で「すっげーすっげー」と大はしゃぎ中である。
「あの変装自体が既に仕込みだったと言う事です。後はご自分で推察しなさい。これも勉強です」
「むぅ。ま、いいけど。でもどうしてそんなに不機嫌そうなの？」
「……修行時代の事です。アレと似たような手で負けた事がありましてね」
「これがお前の戦い方か？」

「卑怯者め？」

「いや、面白い」

そう言って、今度はヒュンケルから仕掛けた。
それは威力よりも速度を重視した疾風の連撃。
その連撃を、まさしく紙一重で回避するアウダー。
衣服には無数の切れ目が入り、血が滲んでいる個所もある。
慣れたとは、どうやら本当の事らしい。
とんでもねえなと愚痴をこぼす。

「剣は抜かないのか？」

「ならそうさせてもらう！」

そう言って腰の剣に手を伸ばしたアウダー。
そのまま一気に抜き放つとヒュンケル目掛けて――投げつけた。

「何！？」

その予想外の行動に対応するため、僅かではあったがヒュンケルの連撃の手が緩む。
払うか、避けるかの僅かの逡巡。

「爆裂呪文（イオ）！」

至近距離から放たれたイオによる爆発が、二人をまとめて吹き飛ばした。
直撃ではなかったが、少なくはないダメージに、吹き飛ばされたヒュンケルの表情が歪む。

（思い切った事をする！）

直ぐに立ち上がろうとして、ヒュンケルは自らの異変に気が付いた。

周囲から音が消え、視界の全てを深い霧が覆っている。

その霧の向こうに、ゆらゆらと揺れる無数の影。

「マヌーサか！？」

「ご名答」

幻惑呪文（マヌーサ）。

ヒュンケルの呟きに応えるように、四人のアウダーがヒュンケルを取り囲む。

その手には、投げ放ったはずの剣が握られていた。

四人の剣が、ゆっくりとその切っ先をヒュンケルへと突き付ける。

「行くぜ」

そう宣告して、四方から同時に仕掛けた。

さあ、この攻撃は防げまい、と。

対してヒュンケルは、迫る四本の刃を巧みにさばき続けていたが、徐々にその身に手傷を増やしていく。

実戦と試合の違い。

互いに本気ではあったが、そこに殺意は無い。

剣から殺気や殺意と言ったものを感じ取れない以上、視覚に頼らざるを得ず。

その視覚が惑わされている今、ヒュンケルにしてみれば目に見える全てに対応するしかない。

さらに厄介な事は、虚実入り混じった攻撃がどれも鋭く速いと言う事。

（全く。意外と義理堅い奴かもしれんな）

そのような状況にあるにも関わらず、ヒュンケルは笑みを浮かべていた。

目くらましを用いての不意打ち、呪文による奇襲、誘い搦め手、自らを巻き込んでの自爆まがいの攻撃にこの仕掛け。

卑怯などと言う気はない。

自分は言ったのだ。戦う気になったお前と手合わせしたい、と。

そして、一連の流れから、おそらく相手も自分を試していると推察していた。

呪文を見せ、策を見せ、体術を見せ、そして今剣を見せようとしている。

ならば、自分も見せるとしよう。

自ら構えを解いたヒュンケルは、静かにその目を閉じた。

（観念した？　――違う！）

こんな程度で観念するような男かと。

アウダーがその真意に気付いた時は遅かった。

「そこだ！」

ガギンと甲高く、打ち合った鋼と鋼の音が響きわたる。

それと同時に消え去る幻。

鍔迫り合いの形となった二人は、互いに相手を押し切らんと手にした剣に力を込めた。

「心眼を頼りに気配を探れば幻惑呪文（マヌーサ）などには惑わされん」

「心眼って……。つくづく……何者だお前は」

そうしてせめぎ合っていた両者であったが、膠着した状況に思うところがあったのか、お互い申し合わせたように距離を開ける。

「次は何を見せる気だ？」

「残念。小細工のネタはもう切れた。後は――加速呪文（ピオリム）！」

アウダーの周囲に風が巻き起こり、淡い光を伴った魔法力がその身を包む。

「正面からやり合うだけだ」

「怖いな、まだ手が有りそうだ」

「信じろよ」

「さて、な」

お互い笑う。

「行くぞ、カンダタ！」

「そりゃ偽名」

互いに舞台を蹴り、真っ直ぐにぶつかり合う。

振り上げられた刃と刃。二人の剣が同時に交差をしあい、まるで

弾かれた様にお互いの位置を目まぐるしく変える。

「俺の名前はアスダーだ！」

速度で勝ったアウダーが繰り出す無数の斬撃を、力と技量で勝るヒュンケルの一撃が押し返す。

観客達はその光景を固唾を飲んで見守っている。

それは、まるで舞踏の様で。

いつしか、場内には澄んだ剣劇の音だけが鳴り響いていた。

しかし、この永劫に続くかと思われた舞踏にも終わりは来る。

バキンと鳴り響く異音。

宙を舞う折れた刃。

額に触れるか、と言う距離で止められた刃。

「ここまで、か」

「ああ。ここまで、だ」

剣を突き付けたヒュンケル。

折れた剣を捨てて、両手を上げるアウダー。

ピオリムの輝きはとうに失われていた。

明確なまでの勝者と敗者の構図。

その光景にシンと静まり返る場内。

口火を切ったのは、やはりというかアナウンサーの言葉であった。

『こ、これは劇的な決着ゥ！！　カンダタ選手を破り、決勝に進むのはヒュンケル選手！　勝者はヒュンケル選手です！！』

パチパチと、誰かの起こした拍手の音が徐々に広がっていく。緊張から興奮へ。沸き上がった歓声が、怒涛の勢いで闘技場内を埋め尽くしていた。

「これで3ポイントだな。次は5ポイントか？」

「イヤミかこの野郎。お前とは金輪際やらねーよ！」

舞台に突き立てた鞘を抜き、剣を収めながら問いかけるヒュンケルに憮然と返すアウダー。

「そう言うな。なかなか楽しかった」

「俺はとてもすごく疲れた」

興奮冷めやらぬ観客達からの称賛の声に、早々と舞台を降りようとするヒュンケル。

それに愛想良く手を振って応えるアウダーの横を通り過ぎると、そのまま控室へと向かい舞台を後にした。

手を振るのを止め、その背中を暫く見つめていたアウダーもやがて舞台を降りた。

控室への通路への道すがら、貴賓席へとアウダーが顔を向ければ、そこでは笑顔で手を振るレオナとダイの姿。ダイの頭の上には、翼の生えた金色のスライムが乗っている。

その光景に、どうやら事がうまく運んだようだとアウダーは安堵

していた。

「見ての通りだ。安心しろ、無事に片は付いた。後は、ダイ君と彼の友人をデルムリン島に送ればお前の義理は果たせるな」

「ああ、助かったよ。でろりんどもに何か仕返しをしてやりたくもあるが。どうなった？」

アウダーが振り返れば、そこには腕を組み気難しい顔をしたバロンの姿。

何だ悩みか、禿げるぞ、と軽口を叩くアウダーをバロンは一睨みして黙らせる。

「お前が素直に礼などを言うから驚いただけだ。何を企んでいる？」

「企むって、お前。そりゃちょいとヒドクないか？」

アウダーとバロン。

この二人は少年期を共にパプニカで過ごした昔馴染であり修行仲間でもあった。

神童とうたわれ、優れた賢者として将来を有望されたバロンと、幼いレオナと共になにかと騒ぎを起していたアウダー。

二人の騒動に巻き込まれ続けたバロンは、いつしか周囲から二人のお目付役の様な役割を任されてしまい、気苦労の絶えない日々を送る事となる。

その結果として、こうして会えばイヤミの一つや二つ、説教の一つや二つ。今の二人の関係があった。

「自業自得だ、日頃の行いを恥じろ。褒美の撤回と一ヶ月間の無償奉仕だそうだ。そこで落ち着いた。それよりも、お前は自分の心配

をしろ。レオナ様は笑っていたが、試合の件をかなり根に持たれている。責任を取れ、だそうだ」

「熨し付けて返す。てかよ、なんでお前らがここに居る……って、いいか別に。で、どーしたよ。わざわざこんなトコで」

すわ闇討ちか、と身構えるアウダーを阿呆と一蹴するバロン。

「お前にしては珍しく真面目に戦っていたのでな。おおまかな経緯は聞いたが、らしくないと思っただけだ」

「どっちが？」

「どっちもだ」

突拍子もない話だけどな、アウダーはそう言って壁にもたれ掛かると、何でもない事のように続けた。

「仲間になれってさ」

その言葉だけでは特に何の問題も無い。

しかし、そのあとに続けられた言葉を、バロンは即座に理解をする事が出来なかった。

「魔王ハドラーが復活したってんでな、共に闘える相手を色々と探してたんだと」

あの時、試合を終え舞台を降りようとしたヒュンケルが、アウダーの横を通り過ぎる時にこう語った。

『敵は魔王軍。かつてより強大になった――新生魔王軍だ』

巨獣の影

「なんとも……荒唐無稽な話ではある」

「だろ？」

いくらなんでも魔王ハドラーはないだろう。
アウダー自身、自分で言っていても胡散臭い事この上ない。

「だが、嘘を吐くならもっとマシな事を言うだろうな」

「……だよなぁ。そこんところどうよ？」

そう呟いたアウダーの声色が僅かに変わった事でバロンは気付く。
通路の奥へと向けられたその視線。
その視線の先に、こちらに向かってゆっくりと歩み寄るヒュンケルの姿があった。

「どこで、どうやって知ったのか」

「パプニカの賢者お一人様追加だ。その辺も答えてくれるよな？ヒュンケル」

「オレはその魔王軍にいた」

何でもない事であるかのように、さらっと語ったヒュンケル。
間の抜けた表情を晒す二人の横を、実に愉快なものを見たといった様子で通り過ぎて行った。

「「……」」

『それではッ！　只今より決勝戦を――』

「「……ハッ！？」」

会場内に響き渡るそのアナウンスに、二人はようやく再起動。

「「いやいやいやいや待て待て待て待て待て！！」」

慌てて会場へと駆け出すアウダーとバロン。

「……なんなんだろう？」

「ピピッ？」

「さあ？　でもあんなに慌てた様子のバロンなんて……珍しいものを見たわ」

その一部始終を偶然にも目撃していたのは貴賓席から降りてきたダイ達であった。

会話の内容までは分らなかったが、ただならぬ二人の様子に俄然レオナの興味がわいて来る。

「ほら、追うわよダイくん！　ふふふっ、なんだか面白い事でも起きるのかしら？」

そう言ってダイの手を取ったレオナは、二人の後を追うべく駆け

出した。

「うわうわうわ！？」

突然の事に慌てふためくダイ。

繋がれた手の暖かさと柔らかさ、そしてほのかに感じる少女の香りに胸が高鳴る。

それが一体何なのか。早まる動機に耳まで赤く。

それでも、ダイは置いてかれまいとレオナの手をしっかりと握り駆け出していた。

「……ピピピィ～～」

すっかり静かになった通路には、呆れたような、憐れむような生温かい眼差しをダイ達へと向けたゴメだけが残されていた。

器用にも、その翼を両手に見立て、やれやれと表現しているようにも見える。

「ピピピッ」

気合いを入れたのか、一声鳴くとゴメもまたダイ達の後を追うために飛び去って行った。

そんな自分を、陰からこっそりと血走った狩人の目でずるぼんが見つめていた事をゴメは知らない。

「か、可愛すぎるわあのコ！　お持ち帰りしたい！！」

「バカ、よせっての！」

「こりゃ、落ち着かんかい！！」

力ずくでもと懲りない彼女と、これ以上問題を起こされてたまるかと、必死になって彼女を押さえつけているでろりん達との人知れぬ戦いがあった事は――割愛する。

第5話　巨獣の影

先の準決勝で繰り広げられた戦いもあり、この決勝は誰もがヒュンケルの圧勝だと予想していた。

しかし、その予想は大きく覆されていた。舞台の上では拳や蹴りを打ち込むヒュンケルと、その一撃を凌いでどうにか組技へ入ろうとするゴメスとの壮絶な格闘戦が行われていたのだ。

「ハアッ！！」

「ぐっ、ぬぅおおおお！　ぬおりゃあぁあああッ！！」

お前の技を一度体験してみたい、ヒュンケルはそう言ってゴメスに格闘戦を提案していたのだ。

攻め立てるヒュンケルと、耐え凌ぐ事で僅かな機会を待つゴメス。
相手の攻撃を耐えきった上で勝利する。それがゴメスの求める勝利であり、これまでの試合でもそれを実践し続けている。
見ている観客達もその事が分っているだけに、一方的に見える内容であってもひょっとして、という期待を抱かざるを得なかった。
事実、何度かゴメスの手はヒュンケルの身体を捕えかけている。

熱狂する観客達から一歩離れ、舞台入口の傍で試合を観るアウダー達。
そこには、いつの間にかダイとレオナに加えてでろりん達まで集まっていた。
随分と砕けた様子でダイに接するでろりん達に、一体何があったのかとアウダーはバロンに視線で問いかける。

（どうなってんだコレ？）

（ダイ君が許した事で罪が軽くなったのでな）

ちらりとアウダーはでろりん達を見る。
ダイと並び、大口を開けて試合を観戦しているでろりん。
鼻息荒くヒュンケルの姿を追うずるぼん。
試合には興味が無いのか、壁にもたれ掛りながら涎をたらして眠るへろへろ。

「まあアレじゃな、こうやって知り合ったのも何かの縁。過去の事は水に流して仲良くやろうて」

ほっほっほっ、と笑いながらアウダーの背中を叩くまぞっほ。
今の彼らからは酒場で出会った時の雰囲気は微塵も感じられない。

「……それをアンタが言うなよ……」

真面目に考えるのが馬鹿らしくなり、アウダーは投げやりに答えると再び舞台へと目を向けた。

依然として一方的な展開ではあったが、正直ここまで立っていられるゴメスの頑丈さには呆れを通り越して感動すら覚えてしまう。

「純粋な体術のみのガチンコか。闘気を抑えてまでよくやるねぇ」

闘気とは、一流と呼ばれるレベルの戦士が扱う攻撃的生命エネルギーの総称である。

自身の身体能力を高めるだけではなく、武具に伝える事でその強度を増す事も出来る。

これを極めた者は、自身の闘気によって伝説の武具に匹敵する力を持った闘気の刃を生み出した、とも伝えられている。

「器用なヤツ」

アウダーも闘気を操る術は心得てはいるものの、魔法力を操る術に馴染んでいた事もあり、戦いの場では呪文を交えての戦法を多用していた。

「それにしても、お客様大喜びじゃねえか。あの野郎、変なトコで空気読みやがって」

軽くとは言え、切りつけられれば当然痛いし出血も馬鹿にはできない。

ヒュンケルとの先の試合でも、何度か回復呪文を使って止血をしていなければ貧血で倒れていたかもしれない。

「俺の時にもっと手加減をしておけよ」
憮然として愚痴をこぼすアウダーを冷めた目で見るバロン。
「……お前もな」
お前が言うかと呆れた様子で見つめていた。
マヌーサとピオリムを使用してヒュンケルを斬りつけていた事を忘れているのかと。
「魔法使いが呪文使って何が悪い」
馬鹿ですかアナタ、何言ってるのと言わんばかりのアウダーの表情を見て、バロンの中の何かがキレた。
セーラーレオナの件やら、修行時代の恨みつらみやら。
それらを抑え込んでいた堤防がここで決壊してしまったのだろう。
非常にイイ笑顔を浮かべたバロンは、アウダーの顔面をアイアンクローで捕えると、そのまま片腕で持ち上げてしまった。
「……数年来の溜まりに貯まった貸しをここでまとめて返してもらえるかなアウダー君」
「ちょっ、まっ、いた、痛いから！　コレホントにマジで痛いから！！」
「あんなに楽しそうなバロンは初めて見たわ」
「……あのレオナ、バロンさんを止めなくてもいいの？」
「嫌よ、怖いもん」

ジタバタと抵抗をしていたアウダーであったが、やがて力尽きたのかぐったりとする。
さすがにダイもヤバいんじゃないかと思い、勇気を振り絞ってバロンにアウダーの助命を嘆願した。
ナニやら瘴気っぽいモノを発しそうな雰囲気のバロンに、レオナも含めて誰も関わりたくは無かったのだ。
正直ビビったとも言う。特にレオナにとっては明日は我が身と他人事ではないのだから。
外見に反して根がヘタレなでろりん達は、巨大な恐怖に立ち向かったダイの行動に感動を覚えていた。

「――ハッ！　テメッ、バロン！！　なんか川の向こうで帰れ帰れと手を振る人影が見えたような気がするんです！？」

跳ねるように飛び起きたアウダーは、バロンの襟元を掴むと捲し立てる様に一気に詰め寄る。

「落ち着けアウダー。恐らくそれは東洋の神秘“守護霊様”という奴だ」

大変ありがたいものだ。運が良いな、と落ち着き払った様子でしれっと答えるバロン。

「そうか。アレがそうなのか」

修行時代、仲間内で起こった思い出すのも忌まわしき手料理事件にてバロンが見たというその光景。
説明を求めるバロンに、それは守護霊様だ、などとその場のノリと勢いで同様の説明を行ったのはアウダーだったのだが。

自分が見てしまった以上、現実ってスゲーなと感心するしかない。
しきりに感心しあう馬鹿二人を眺める無垢なる瞳。
「あのさ、レオナ。賢者って“賢き者”って書くんだよね」
あまり多くの字は読めないダイであったが、憧れであった勇者や僧侶、賢者といった文字は真っ先に覚えていたのだ。
「ピピィ〜？」
「ほら、何とかと何とかは紙一重って言うらしいから」
パプニカ王国では、本来バロンレベルの賢者は、有事に備えて国内でどっしりと構えているのが普通である。
今のように自分のお目付役として世界各地を巡る見分の旅に同行する事などはまずあり得ないと言ってよい。
「……疲れているのね」
生暖かいぐらいに優しい眼差しでレオナはバロンを見つめる。
本来ならば行わずともよい役目のために、疲れが溜まっていたのだろうと推察していた。
その実は、レオナの行動を諌める事、その無茶ぶりについていけるだけの適任者がバロンしかいなかっただけである。
「やっぱり、しばらく休養を申しつけたほうがいいかしら？」
余計な心労が増えるだけから止めてくれと訴えるバロンの声は届かない。

レオナは少し真面目に考えてみた。代わりに誰が、である。
一番あり得るのは“パプニカ三賢者”であるアポロやマリン、エイミであろう。
三賢者とは太陽と風と海を司るパプニカ王国の守護者の称号。
心技体に優れた賢者に贈られるこの称号は、パプニカで魔法を目指す者にとって最高の栄誉と言える。
三人とも、自分より五歳は年が離れているが、気心も知れている分、他の者達よりも気分的には楽ではある。
しかし、彼らは役割に忠実というか、どうしても臣下としての態度が目立ち、今のような羽目を外した行動はそうそう出来なくなるだろう。
そう考えると、バロンがお目付役から離れるのはあまり宜しくない。
甘えである事は自覚しているが、この見分の旅の後に行われる洗礼の儀が終わってしまえば、そこで一人の少女としてのレオナは舞台を降りる。
以後はパプニカ王女としてのレオナが舞台に立つ事になる。
おそらく、少女としてのレオナがこうして自由に振る舞える事は無くなるのだろう。

「な～に深刻そうな顔してるんだ？」

「ッ！？」

思わず上げそうになった悲鳴を必死に堪える。
俯いていた自分の顔を下から覗き込むように、言葉の通り目の前にアウダーの顔があった。

「な、なな、ちょっ、ちょっとアウダー！？」

突然の事にわたわたと慌てるレオナ。
赤面した顔を隠すかの槽に、プイッと顔を背けた。

「いや、だから何なんだ？」

落ち着けあたし、と深呼吸を繰り返す。
どうにか落ち着きを取り戻したレオナは、観客達の歓声が一際大きくなった事で、その視線を舞台へと向ける。

「お、チャンスだな」

つられる様に舞台へと視線を向けたアウダーが呟いた。
そこでは、胴体に食い込んだヒュンケルの拳を、ようやく捕えたとゴメスが両手で掴んだところであった。

「それじゃ、夕方までにお願いね」

「おうよ、任せときな」

思わぬ好評で夜の分の食材が足りなくなると、ルイーダはその分の買い出しを行うため、商店街にまで足を運んでいた。
いつもの店に配達をお願いすると、時間に余裕がある事に気が付いた彼女は少し寄り道をしてから帰る事に。

「目新しい露店でもないかな？」

人混みの中をのんびりと歩いていたルイーダは。そこで異様なモノに遭遇した。
３メートル近い高さの子山が、人混みを掻き分けて進んで来るではないか。
徐々に近づくにつれて、ソレが積み重なった荷物の山である事が分る。

「そっか、そろそろだったか」

もうそんな時期かと思い出し、ルイーダは荷物の山へと向かい進んで行った。

「アレは買ったし、アレも……うん、これで頼まれていた分は終わりだよ、マァムお姉ちゃん」

「そっか。考えてたよりも時間が空いちゃったわね。ディアナはどうしたい？」

「久しぶりの王都なんだから――って言いたいけど。遅くなってミーナに怒られるのも嫌だしなぁ」

商店街を仲良く歩く二人の少女。
会話だけならば、それはどこにでもあるほのぼのとした仲の良い友人や姉妹のものだ。
マァムと呼ばれた桃色の髪の少女の周りを、ディアナと呼ばれた小柄な黒髪の少女が楽しそうにちょこちょこと動き回っている姿は実に微笑ましい。

「ん？　へー、武道大会だって。マァムお姉ちゃんも出たら？　絶対優勝できるよ！」

こう、バッタバッタと殴り倒して、と身振りを交えながら語るディアナ。

「あのね。私も女の子なんですけど？　普段どーゆー目で私を見ているのかがよ～っくわかったわ」

そう拗ねたように言うマァムに、ゴメンゴメンとじゃれつくディアナ。

実に微笑ましい姿ではあるのだが、それに反して道行く人々は二人の姿を見ると避けるようにして道を空けてゆく。

悪意があるわけではない。善意の上で、であった。

「相変わらずすっごいわねぇマァム。イロイロな意味で」

「え、その声」

「あ、ルイーダさん。久しぶりー」

「やほ、久しぶり。元気だった？　ディアナ」

動く荷物の山の下に辿り着けば、そこにはルイーダの予想通りの人物の姿。

常識的に無理。誰が見てもそうとしか思えない量の荷物を、絶妙のバランスで“軽々”と運んでいたマァム。

そして、子犬のようにじゃれついてくるディアナであった。
マァムとディアナ。二人は迷いの森の近くにあるネイル村で暮らしているルイーダの友人である。ちなみにマァムとディアナは姉妹ではない。
定期的に王都へと買い出しに来るマァムと、店の仕入れのためにこうして商店街に頻繁に顔を出すルイーダは、お互い顔を合わせる機会が多かった。
最初は挨拶程度であったものが、いつからか言葉を交わすようになると、歳も近い事もあってか瞬く間に打解けて友人となっていた。
ディアナとはその少し後からの付き合いである。

「元気と言えば、最近お兄さんからの連絡はあった？」

付き合いと言えばもう一人。
ルイーダはマァムやディアナに対して過剰なまでに過保護だった彼女らの兄的存在を思い浮かべた。
十五年前の戦乱の時に顔に大きな傷を負ったという事で、常日頃から仮面をつけて生活をしていたらしい彼。
しばらく前に置き手紙を残して旅に出たと聞いている。

「全然。でもラーハルト兄さんの事だから、何かあった時にしか連絡なんて寄こさないと思う」

自分にも他人にも厳しい人だったから、と苦笑するマァム。

（いやそれは無い）

本人がどう思っていたのかは判らないが、少なくとも客観的に見ていたルイーダやネイル村の人達、保護対象者であったディアナはラーハルトの過剰なまでの過保護っぷりに気が付いている。

ラーハルト本人は厳格な兄的存在のつもりであったのだろうが、皆空気を読んで何も言わなかっただけであった。知らぬは本人とマァムだけである。

「まあ、だったらいいんだけど。それにしても、最近ディアナが一緒に来る事が多いよね」

ラーハルトが旅に出てからは、マァムの付添いの相手が色々と変わっていたのだが、ここしばらくは当たり前のようにディアナがついて来ていた。

「ふっふっふ。こー見えても今ではわたしだって村二番、じゃなかった。三番目の使い手なのよ」

一番は母レイラ、二番は姉であるマァム、三番手は村長であったのだが、先日ぎっくり腰をやってしまい泣く泣くその座をディアナに譲っていた。

どーだ、と十二歳の発展途上の胸をこれでもかと張るディアナ。

すとんぺたん。

その隣にはボンキュッボン。

十六歳でありながら既に完成の域に達しようかというマァムの存在。

遠い――あまりにも。

思わずディアナの心が折れかけるが、未来を信じてここで倒れはしない。

だが、ルイーダはディアナのように未来を信じる等と言っていられる程の余裕はない。

恐るべき事に、マァムのソレは完成ではなくさらに成長を続けている。

そして、カラッとした性格、大の大人が束になっても敵わない強

さ、容姿も良く、属性“天然”を備えながらも、そのくせ実は家庭的という女の目から見ても優良物件。
これ以上まだレベルを上げる気かこの娘は。
客商売をしている以上、ルイーダも多少は自分の容姿やスタイルに自信を持ってはいたが、この件に関してはいかな友とは言え――敵である。

「ええいっ！　それにしてもけしからんっ！！　また育ちよってからに！」

「きゃあ！　えぇえ、ちょっ、まっ、やめ――あッ～～」

ついにソレを鷲掴みにしてもみしだくという暴挙に出た。
荷物のせいで手を離す事も敵わず、抵抗できないマァム。
往来で突如として始まった実にけしからん光景に、人々の注目が集まる。特に男の。

「また始まった」

ルイーダは良い人なのだが時々おかしくなる、とディアナは他人のフリを決め込んだ。
とは言え、いつまでもこのような事を続けさせていては、そのうち見回りの兵士達に見つかってお小言は必至である。

「それは嫌だなぁ。レイラお母さん怒ると怖いもん」

どこで止めるべきかと思案するディアナであったが――

「――あれ？」

不意に辺りが暗くなった事で、その顔を上げた。
道行く人達も、何事かと空を見上げる。
まるで水面に生じた波紋の様に。
マァムもルイーダも、この場にいる全ての人が空を見上げていた。

「――巨人？」

誰が呟いたのか。
逆光に浮かぶその影は巨大な翼を持った巨人にも見える。
影はそのまま闘技場へと向かい飛び去って行く。

「お、おい、何だよアレ？」

「ド、ドラゴンなのか？」

「魔物じゃないのか？」

ざわめき始めた人々の中で、ディアナは俯いてその小さな肩を震わせていた。

（見間違いなんかじゃない）

どうしてそんな事が分ったのか。
ただ、ディアナにはあの影が己を見上げる人間の姿を見て嗤った事が解った。
理屈ではなく、感覚がそれを捉えていた。それが絶対的な力の差に対しての優越感から来る黒い感情である事も。
怖い、今の自分ではどうやっても敵わない。
そう思い、恐怖に震えた。
その事が――悔しい。

「ゴメン、ルイーダ。ディアナと荷物をお願い！！」

「え、ちょっと！？　うわきゃああっ！」

マァムはそう言って荷物をルイーダに任せると、影を追って走り出した。

大量の荷物に埋まり文句を言うルイーダに、ゴメンと手を挙げて駆ける。

マァムもまた、ディアナほどではないが、あの巨大な影に良くないモノを感じていた。

あの先で、きっと良くない事が起こる。その確信があった。

母から受け継いだハンマースピアを握りしめ、師の言葉を思い出す。

「見過ごす事なんて……」

「待ってお姉ちゃん、わたしも行く！」

「ディアナ！？」

自分を追いかけ来たディアナの声に、マァムは咄嗟に駄目だと言いそうになったが、ディアナの手に握られた物を見て、この子もまた師の教えを受けた者だと思い直す。

「危なくなったら逃げなさい。約束よ」

「うん。……分ってる」

握りしめた“魔弾銃”を胸元に抱き、緊張した様子で頷くディア

ナ。
その硬い表情を見たマァムに不安がないと言えば嘘になる。
しかし、ここで駄目と言っても来るだろう。誰に似たのかこういうところは頑固だから。
だったら、自分の知らないところで無茶をされるよりはと、マァムはディアナの同行を認める事にした。
何もなければ、そう願いながら。

しかし、その願いは届かない。

あの影の向かった先である闘技場へと近付くにつれて、異変がハッキリと分った。
次第に大きく聞こえる人々の悲鳴や怒号。次いで聞こえる爆発音は、そこが既に戦場と化している証明。
戦う力を持たない者は逃げ惑うしかない。
手にしたハンマースピアを強く握りしめたマァム。
すれ違う人が増える中で、もさっとした特徴的な髪形をした中年の男が倒れこんだのを見たディアナは、その男に駆け寄るとホイミを唱えて傷を癒す。

「おじさん、向こうで何が起こったの？」

「ば、化け物が出たんだよ！！」

男は語った。
決勝戦の最中に、闘技場の中に鎧を着た馬鹿でかい化物が現れた。
指示に従って外に逃げてみれば、そこには怪しい男女が待ち構え

ており、六本腕のゴーレムが観客達を襲い始めたのだと。

「中ではアウダー達が、外ではバロリアや兵士達が戦っちゃいたけどよ。ありゃあ俺にだって普通の相手じゃねえって事ぐらい分る！こうなったら店にいた奴ら全員引っ張って来てやる！！」

「ちょっと！　おじさん！？」

「ありがとよ嬢ちゃん。もう大丈夫だ。城下にルイーダの酒場って店がある。騒ぎが収まったら来てくれよ。お礼をするぜ」

そう言うと、男は城下へと走り去って行った。

「……正義なき力は無力、力なき正義は無力……」

魔弾銃を握りしめ、師の教えを反芻するディアナ。

その眼にはもはや怯えや迷いは無い。

「よしッ！」

改めて気合いを入れたディアナは、先を行くマァムの後を追うべく駆け出して行った。

強襲ザングレイ

ゴメスの腹部に突き立てられたヒュンケルの拳。その光景に観客の誰もがゴメスの敗北を確信した。
しかし、アウダーとバロン、そして当人同士であるゴメスとヒュンケルは違う。

「……へっ、へへへ」

自分ではヒュンケルの動きを捉えきれないと悟ったゴメスが取った勝利に繋げられる唯一手。

「……や～っと――捕まえたぜ？」

肉を切らせて骨を断つ、という言葉を実践したのだ。
ヒュンケルからの攻撃を受けるという事は、彼が自分の間合いに居るという事。この瞬間であれば手が届くのだ。
問題はヒュンケルの一撃をまともに受けて耐えられるかどうか。
結果としてゴメスは賭けに勝った。そして、耐え忍んだ果てにようやく得た好機。
逃がしてたまるかと残る力を振り絞り、ゴメスはついにヒュンケルの腕を掴み取る事に成功した。

「――してやられた、か。たいしたタフネスぶりだ」

魔物顔負けのその巨体、鍛えられた肉体は飾りではなかったという事か。
甘く見ていたわけではないが、正直今の一撃で終わらせようと考えていたヒュンケルは、このゴメスの覚悟を素直に称賛していた。

「まったく、恐れ入る」
攻勢から一転、ついに窮地に陥ったヒュンケル。
観客達はこの展開に否応もなく興奮する。
試合は今まさに正念場を迎えようとしていた。

「おおー、すっげえなあのデカイの！　いいぞやっちまえ～！」
「ちょっとちょっと～、ヒュンケル様がピンチじゃない！？」
もはや完全にただの観客と化しているでろりんとずるぼん。
「あぁあああああ！　こらハゲ！　なんてことをするのよぉおおおおおっ！！」
今の自分達がどれだけ微妙な立場であるのか。二人の頭の中からは綺麗さっぱり消え去っていた。
「んお？」
美形（イイオトコ）のピンチに我を失ったのか。
ずるぼんは隣にいたまぞっほのローブの襟を掴むと、
「お、お、お、ま、待て、やめ、やめ――ガクン」
持ち上げて激しくシェイクを繰り返す。
白目をむいたまぞっほの様子など、興奮したずるぼんの眼には全

く映っていない。
巻き込まれる事を恐れたでろりんはバロンの背後へと早々に避難し、へろへろは相変わらず涎を垂らして眠っている。
今の彼らに勇者様と称えられていた時の面影は微塵も無かった。

「ほら、何してんだよダイ！　あんたもヒュンケル様の応援をしなさいよ！！　ほらゴメちゃんも！」

憐れ、ただの屍と化したまぞっほをずるぼんはゴミのように放り捨てる。

「え、え、え、うわうわうわ！？　た、助けてアウ――むぎゅ！？」

「ピッ、ピピ～ッ！？」

生贄を失い手持無沙汰になったのか、ずるぼんは近くで観戦していたダイを捕まえると、ゴメも巻き込みその豊満な胸元へと抱き寄せた。いわゆるぱふぱふと呼ばれる体勢である。
色気も無ければ艶も無く、他意も無い。ずるぼんにしてみれば近所の子供を相手にしているノリである。意外と面倒見が良いらしい。まだ夢見る無垢な乙女であった頃、ずるぼんの将来の夢は保母さんだった。

（わ、悪い奴らだったはずなのに、この馴れ馴れしさは何なん――むぎゅう）

根が単純なダイもさすがに戸惑う。
特に、この顔全体を覆い尽くす柔らかで温かい感触に。
デルムリン島を出てからこれまで、急速に異性と触れ合う機会にさらされているダイとしては、もうどうしていいのかが分らない。

嬉しいような恥ずかしいような、とにかく何が何だか分らない。
そんなダイにも分っている事が一つある。
「あんにゃろめ。まさか天然のラッキースケベか？　許せんな、ここは保護者として正しい教育を！」
このままでは自称保護者からヒドイ目に遭わされそうだと言う事であった。
「……お前は子供相手に何を言ってる？」
「あふっ！？」
バロンの痛恨の一撃。
「なにしや――」
「自重しろ、この変態」
レオナの止めの一撃。
「――がふッ！？」
そして仕上げとばかりにぐりぐりと踏みつけ攻撃。そのスジの方々にはご褒美だがアウダーはまだその領域には達していない。
主従の完璧な連携攻撃の前に、今日三度目の敗北を喫していた。
「チィッ！　しかし伝説の遊び人パノンを目指した男としてはこのまま黙ってやられるわけには！」

「くっ、こいつ、しぶとい！？」
見下すレオナ、見上げるアウダー。
互いの視線が交差し、ぶつかり合い、そしてアウダーの視線が逸れた。
「――黒、か。まだ早――」
「しね」
「うおっとおぉぅ！？」
気合い一発。バッタのように跳ね起きるアウダー。
お約束に身体を張れても、レオナの本気の踵を前にやはり命は惜しかった。
「昔はカッコ良かったってーのに。……ちょうどいいわ。アンタにはいっぺん乙女心ってヤツを身体の芯まで叩き込まなきゃいけないと常々思っていたの、特に今」
「いや、俺は男の子なんで乙女心なんて叩き込まれてもわかりっこないから。わかりっこないから」
「遠慮しなくてもいいんですよ、おにいさま？」
その天使のような眩しい笑顔が怖すぎる。
じわじわと壁際に追いつめられるアウダー、にじりよるレオナ。
蛇に睨まれた蛙である。
「あ、なんかその呼び方久しぶり？　怒っていらっしゃいましたり

されてます？　助けてバロオオオオン！？　友が貞操の危機だよ！？」

「そうか。良かったな。玉の輿だな」

舞台に目を向けたまま、バロンはぞんざいに答える。
もう好きにしろと言わんばかりの態度である。実際どうでもよいと思っていた。

「んふふふふっ、観念なさい」

「待て、落ち着――」

両手をわきわきとさせたレオナがアウダーに触れようとしたまさにその時であった。
舞台の上を巨大な影が覆ったのは。

「んあ、なんだありゃあ？」

「鳥にしては随分と大きいのぉ……って」

「「なんじゃありゃあぁあああああっ！？」」

でろりんとまぞっほが上げた絶叫に、何かあったのかとアウダーとレオナが舞台へと視線を向ける。

『クゥワアアアアアアアアアアアアアアッ』

「何だ！？」

「きゃあっ！？」

突如聞こえたその甲高い鳴き声に、アウダーは咄嗟にレオナを抱き寄せる。

その直後、巨大な何かが舞台の中央に落ちたのを見た。

ドゴンッ、という轟音と共に石畳は砕け散り、撒き上がった砂塵が舞台を覆う。

その衝撃によって壁には亀裂が走り、通路の天井からはパラパラと破片が落ちて来る。

「ちょちょちょ、ちょっとー！？　なんなのよー！！」

「わわわ、ワシが分るわけないじゃろが！！」

「あれってガルーダだ！　でもあんな大きな奴は島でだって見た事ないよ！！」

「飛び去って行くな。何かを運んできたという事か？　アウダー、レオナ様は無事か？」

慌てふためくでろりん達とは対照的に、バロンは冷静に状況を判断しようと周囲を窺う。

「大丈夫かレオナ？」

「う、うん。ちょっと耳鳴りがする様な……気がするけど」

胸元から聞こえるレオナの声が、予想以上にハッキリしていた事にアウダーは内心安堵していた。

「大丈夫だ。バロン、そっちはどうだ？」

髪の毛に付いた埃を払ってやり、レオナの身体をそっと離したアウダーは舞台の様子を窺っているバロン達の元へと向かった。

それまでの場内の熱狂が、水を打たれたように一気に静まり返っていた。

空から何かが落ちて来た。

目の前で起きた事はこれが全てである。

誰もがその事を分ってはいるのだが、あまりにも突拍子が無さ過ぎて、何が、何故と、その意味を理解する事が出来なかった。

「な、何事か！？」

観客達が呆然と、呆気にとられる中で、貴賓席ではいち早く我を取り戻したシナナが兵士達に状況の確認を求める。

「い、いえ、その、空から何かが降って来た、としか……」

「そんな事は分っておる！　じゃから何がと――いや、怒鳴ってすまんな。どうやらワシも混乱しておるようだ」

「いえ、王の心中お察し致します。我々もそうですから……」

報告する兵士もしどろもどろであり、彼らもまた何が起こったのかを理解する事が出来ていない

「観客達は――無事のようじゃな。そうじゃ、選手はどうなった！？　無事か！？」

誰か、直ぐに舞台へ。

シナナが兵士達に命じようとした時にそれは起こった。

『ガァァァァァァァァァァァッ！！』

それはまさしく獣の咆哮。耳をつんざくばかりの轟音が響き渡ったのだ。

舞台の上で撒き上がっていた砂塵が突如として渦を巻き、まるで巨大な柱の様に立ち昇る。

その声を聞いた瞬間、シナナは全身に突風が吹きつけられたような衝撃を感じていた。

さすがに側近の兵士達の中には膝を着く者はいなかったが、気の弱い文官などは腰を抜かしている。

全身を駆け巡る悪寒に、シナナは貴賓席の手すりを握る腕が震えている事に気が付いた。

この感覚を知っている。

若き頃、自ら兵を率いて魔王の軍勢と相対した時に感じた――邪悪に満ちた波動を。

「馬鹿な、ありえん！？　まさか……まさか！？」

『グゥルゥァァァッ！！』

そのシナナ王の言葉を遮るように、砂塵の柱がまるで内側から弾けるように消し飛んだ。

「我が名はザングレイ！」

その中からゆっくりと歩を進める牛頭の巨人。
日の光を受けて金と銀の光を放つ重厚な金属鎧（プレートメイル）。
身の丈はあろうかという巨大な戦斧を手にしたその異様。
事ここに至り、ようやく状況を理解し始めた観客達の中から次第に悲鳴にも似た声が上がり始めた。

「ぐわはははははははは！！　どうした人間ども」

巨人が手にした戦斧を無造作に振るう。

「対応が遅い、反応が鈍い！」

生じた突風は衝撃波と化して、舞台を覆う壁へと叩き付けられた。

「せっかく時間をくれてやったというのに呑気なものだ！！」

亀裂を奔らせて、壁面が崩壊する。

「覚えておくがいい人間どもよ！！」

景気付けのつもりか。巨人が己の力を誇示するべく戦斧を足下に叩き付けた。
轟音と共に崩れる舞台。

「我こそが新たなる魔王軍百獣魔団を統べる者！　獣将ザングレイよ！！」

再び名乗りを上げたザングレイが戦斧を振るった。

観客席に向けて。

「グハハハハッ、グハハハハハハハハッ！！」

爆音が響き粉塵が舞い上がる。

瓦礫の山と化した一角に赤い色が流れていた。

誰かの上げた悲鳴はそれを聞いた者に伝播し、恐怖は瞬く間に伝染する。

恐怖に怯え、泣き叫び、逃げ惑う人間の姿に満足したのか。

ザングレイは口元を歪ませると、この場にいる人々を絶望の淵に叩き落とすべく吼えた。

「聞け人間どもよ！　これより俺様の手で貴様らを皆殺しにしてやろう。貴様らの嘆きの、絶望の、怨嗟の声を、魔王軍再興の狼煙としてくれるわ！！」

第６話　強襲ザングレイ

泣き叫ぶ人の声、巻き起こる悲鳴。
全てがまるで遠い場所の出来事のようで。
人が死んだ。目の前で。呆気なく。
この現実感の伴わない光景を前にして、ダイは呆然とその場に立ち尽くしていた。

「あの野郎、やりやがった！」

そんなダイを押し退けて人影が飛び出す。
アウダーだった。

「アウダー！？　どうする気なんだよ！！」

「ぶっ潰す！！　バロン、お守を頼む！」

無茶だとダイが引き止める間も無く、バロンが応じた。

「使え！」

バロンがアウダーに一本の短剣を投げ付ける。
それはパプニカ王家に伝わる三本の聖なるナイフ、その一刀。海の紋章が刻まれたナイフであった。
秘術を用いて精製された特殊な金属を使用したそのナイフは、並の刀剣とは比べ物にならない切れ味を有していた。パプニカ王家の秘宝の一つである。

「助かる！！」

先の試合で剣を失っていたアウダーにとって、それは何よりの心

遣い。
素早く腰に差しこむと、ピオリムを唱えてザングレイへと向かい駆け出した。
「レオナ様、ダイ君。アウダーがアレを引き止めている間に我らはここから離れます」
そう言って、バロンはレオナとダイの手を掴みこの場から離れようとする。
「そんな、駄目よ！」
しかし、レオナはその手を払うとキッと強い眼差しでバロンを睨み非難した。
「足手纏いだと言っているのです！」
「そんな事分ってるわ！　それでもここにいる人達を放ってなんて置けないでしょう！？」
そう叫ぶレオナが見つめる先には逃げ遅れた人々の姿があった。
「自分に……出来る事をするだけよ。お願いバロン」
決意を込めたレオナの眼差し。
その瞳を見つめ続け、やがて溜息とともにバロンが折れた。
「分りました。それではレオナ様は私と一緒に彼らの避難を手伝いましょう。それから――」

そして、バロンは後方で騒がしくうろたえているでろりん達を見る。

「あお、おいおいおい。ど、ど、どどうするんだよ」

「どうって、逃げるに決まっとるじゃろが！」

「そ、そーよ！　アイツ皆殺しとか言ってるじゃない！！　絶対ヤバイって！！」

「待てお前達。この際だ、逃げるなとは言わん。ならばダイ君も連れて行け」

「えっ？」

ここで自分の名前を出された事に驚くダイ。

自分もレオナ達と一緒に逃げ遅れた人々の非難を手伝うものとばかり思っていただけに、バロンの言葉は意外過ぎた。

「そんな、おれも手伝――」

「気付いてはいないのか？　自分のその震えた身体を」

「――あ」

バロンにそう指摘された事で、ダイは初めて自分の身体が震えている事に気付く。

「な、何だよ、こ、こんな、ものッ……ッ……。　こんなものっ！！」

「ピピ〜〜ッ……」

心配する様に飛び回るゴメ。それに対して何でもない、大丈夫だと必死に震えを抑えつけようとするダイ。

その様子をじっと見つめていたバロンは、ダイの肩に手を置き目線を合わせる様にしゃがみ込むと、静かに、諭すように語った。

「キミのその気持ちはとても尊いものだ。だが、キミはまだ幼い。焦らずに、その気持ちを大切にしながらゆっくりと成長すればいい」

「……おれが子供だから？」

ダイはバロンと目を合わせようとせず、俯きながら堪えるようにして呟く事しかできない。

「誰だって子供だった頃はあるものだ」

ダイの肩を軽く叩き、立ちあがったバロンはでろりん達に頼むぞと告げてレオナの手を取る。

行きましょうと、バロンが駆け出そうとしたその時、パンと言う乾いた音が通路に響いた。その音にバロンとレオナが振り返ろうとして、もう一度。

自らの手で両頬を赤く腫らしたダイが立っていた。

その身体に先程までの震えは無い。

真っ直ぐに前を見据えるその姿に、全くと苦笑するバロン。

「……分った。キミも手伝ってくれ、ダイ君」

「うん！」

ダイ達が駆け出して行き通路に残されたでろりん達は、しばらく無言のままお互いの顔を見合わせていた。
そんな中ひっそりと目を覚まし、一連のやり取りを見ていたへろへろがポツリとこぼす。

「……オレたちは、これから、どうする？」

その言葉に、でろりん達の間に緊張が走った。
この混乱の中であれば、この国から逃げ出してもバレはしないだろう。
先程バロンも逃げていいと言ったではないか。
正直言って、無償奉仕なんて嫌なのだ。
こんなヤバそうな厄介事などゴメンなのだ。
ならば、逃げるかと、普段の彼らであればそうなる。これまでだってそうしてきたのだから。

「このまま……逃げるのもなあ」

化け物に向かって行ったアウダーを見た。

「なんだかねぇ。あんなのを見ちゃったら……ねえ？」

震える身体に喝を入れ、勇気を振り絞ったダイの姿を見た。

「ここでほとぼりが冷めるのを待つ、という手もあるぞ？」

自分に出来る事を、そう言って駆け出したレオナを見た。

「人、死んじゃったんだよな」

冷静に、己のなすべき事をなそうとするバロンの姿を見た。

「なあ、あの殺された人達の中にさ、俺達の事を――勇者様って呼んだ人はいたのかな？」

何故そんな事を思ったのか。口に出したでろりんにも分らない。

「……さてな、そんな事は神のみぞ知る、というヤツじゃろうて。小悪党なワシらには一生かかっても分りはせんよ」

普段と変わらぬ様子で何でもない事のようにまぞっほが答える。

「そうだよな。小悪党だもんなオレ達って」

そう言ってでろりんが笑った。

「そーそー、細かい事を考えたってしょうがないわよね。アタシらは所詮アタシらでしかないんだもの」

「だよな。なら、俺達らしくやるか！」

途端に明るさと騒々しさを取り戻したでろりん達。

開き直ったのか、それとも吹っ切れたのか。

確かな事は、彼らの中で何かが変わったと言う事であった。

「ふはははは、どうしたどうした！　最初の威勢はどうしたぁ！！」

「うるせぇんだよこの野郎！！」

ザングレイの振るう戦斧の一撃をひたすら回避し続けるアウダー。繰り出される攻撃のほぼ全てが力任せの大振りであったため、回避する事にはさほど苦労は無かったのだが、問題はその余波による衝撃波と飛散する瓦礫にあった。

なまじアウダーの速度が高速であるがために、たかが瓦礫と言えどもまともにぶつかっては多大なダメージを受けてしまう。

事実、すでに回復呪文により傷は癒しているものの、アウダーの左肩は流した血の跡によって赤黒く染まっていた。

「閃熱呪文（ベギラマ）！！」

ヒュンケルに放ったギラとは違う、命を奪うつもりで放たれた全力の閃光。

それは、たちまちの内にザングレイを包み込み焼き尽くす――はずであった。

「何っ！？」

「グフフフッ、この鎧にその程度の呪文など効く物かぁッ！！」

ザングレイの宣言通り、アウダーの放ったベギラマはザングレイの鎧に触れた瞬間に拡散し、その威力を著しく減退されていたのだ。

「鏡の鎧？　いや、拡散しているところを見ると散魔の系統か。なんにせよ伝説級の武具じゃねえか」

推察を試すべく火炎呪文（メラ）や氷系呪文（ヒャド）を唱えるが、結果は同じ。
ならばと、王家のナイフで斬り付けるが、鎧にはキズを、皮膚には掠り傷を負わせられる程度でしかなく。
相手の攻撃は当たらないが、こちらの攻撃も通じない。
攻撃を当てられないザングレイと、当てても大したダメージを与えられないアウダー。
一見互角のようであるが、そもそも人間と魔物とでは基本的な身体能力が違う。スタミナも体力も違う。
更には、その差を魔法によって埋めている今のアウダーには、魔法力という制限がある。
永遠に呪文を唱え続ける事など誰にも出来はしない。
魔法使いにとっては魔法力イコール精神力のようなもので、精神の疲労は肉体の疲労にも繋がる。その逆もしかり。肉体の疲労は精神の疲労にも繋がる。
このままの状況が続くのであれば、やがて肉体的にも精神的にも疲労したアウダーの敗北は必至であった。

「だからってな！」

しかし、アウダーに焦りは無かった。
鏡の武具では無く、散魔の鎧であるならば打つ手はある、と。

周囲を見渡せば至る所に瓦礫の山が出来ており、中には今この時にもガラガラと崩れ落ちている場所もある。

「がはははははッ。どうした小僧、もう終わりではつまらんぞ？」

戦いの余波で随分と場内が破壊されていたが、客席に残っている人影はまばらになっている。

「まさか。これからだぜ？」

なら避難は上手く進んでいると思う事にして、アウダーはその視線をザングレイへと向けた。

「今からそのご自慢の鎧を――粉砕してぶった切る！！　物理障壁呪文（スカラ）！」

魔法力によって構成された障壁がアウダーの身体を包み込む。

真っ直ぐに振り下ろされた戦斧を重心を移動させる事で躱し、ザングレイの懐へと一足で踏み込む。襲いかかる衝撃波と飛礫は展開されたスカラ障壁の前にその勢いの大半を失っていた。

それでも幾つか障壁を抜けた飛礫がアウダーの身体に当たるがそれを気に掛けている余裕は無い。

「小癪な真似を！！」

握り潰してくれると、ザングレイは手にした戦斧を投げ捨てて懐に潜り込んだアウダーに剛腕を伸ばす。

すると、両手をザングレイの鎧に押し当てたアウダーがニヤリと笑みを浮かべた。

その不敵な姿にいぶかしみ、初めてザングレイの表情から余裕が消える。

「加圧呪文（ボミオス）！」

「ぐうおッ！？」

ズンと、全身を襲う圧迫感にザングレイの口から呻きが漏れた。
「な、何だこの感覚は？　この鎧がある限り呪文が効くはずが！？」
己の武具に対する絶対の自信。それが大きければ大きい程に、覆された時の動揺もまた大きい。
「ボミオスは空間に作用するんだよ、満遍なくにだ。意外と隙間が多いぜ、その鎧」
ザングレイの懐から飛び退いたアウダーが、その手に王家のナイフを構える。
「ああ、そうだ。ちなみにな、ボミオスの効果は今テメエが感じてるソレだけだ。ははははっ、傑作だったなさっきの顔は。偉そうに大口叩いておきながらねぇ」
そこで一拍置くと、アウダーはやれやれと小馬鹿にするように続けた。
「ビビってんじゃねえよ、マヌケ」
「貴様ァアアアアアアアアアアッ！！」
ボミオスの圧力を気迫で掻き消したザングレイが怒りに満ちた眼差しをアウダーに向けた。
粉砕だのなんだのと言っておきながら、やってみせた事はただのこけおどし。ハッタリに過ぎなかった。
一瞬とは言え脅威と感じた事に、舐められたと馬鹿にされたのだ

と悟る。
完全に頭に血が上ったザングレイに周囲が見えるはずも無く。目の前の小癪な人間しか見えていなかった。
戦斧を即座に拾い上げて吼える。
「ただでは済まさんぞッ！！　なぶり殺してくれるわァアアアアッ！！」
砕け散れとばかりに手にした戦斧を振り下ろした。

「ご協力感謝いたします！」
「それよりも後どれ程の人が？」
「いえ、もうここまで来れば後は我々だけで十分です。まだ何が起こるか分りませんのでレオナ様方も早く避難を！」
レオナ達と共に、逃げ遅れた観客を闘技場の出入口まで誘導した兵士は、そう言い残すと再び場内へ駆け出して行った。
彼と入れ替わるように、数人の観客を連れたダイがやって来る。
「後はアウダー達ね。バロン、私達の事はもう大丈夫だから」
「……拙いな」
助けに行ってと続けようとしたレオナであったが、そのバロンの

呟きに視線を追って、その意味を察した。
闘技場から避難する人々の流れに反して、何が起こったのかと状況を知ろうとした野次馬達が集まり始めていたのだ。

「ああっ、もう！　こんな時に！！」

その光景に、レオナは思わず頭を抱えたくなった。
呑気な野次馬が集まる余裕があるという事は、ここ以外には特に異変は起きていない、という事なのだろう。
だからと言って、何も起こらないとは限らない。
場外の脅威を警戒したからこそ、場内で暴れている魔物をアウダーに任せて観客達の避難を優先したのだから。

「またややこしい事になってきたわね」

愚痴をこぼしても始まらない。
やるべき事をやろうとレオナが気合いを入れた。

「レオナ様！」

その時であった。

「危ないレオナ！！」

「え？」

ゴッ、という鈍い音と身体に感じる衝撃。
気付いた時には、レオナはダイに押し倒されるような格好で弾き飛ばされていた。

「ちょっ――！？」

一体何がと、起き上がろうとしたレオナの目に異様な光景が映る。
先程まで自分が立っていた場所に何かが撃ち込まれたような跡が出来ていたのだ。

「ッ！？　まだ！」

「きゃあッ！？」

再びダイに弾き飛ばされるレオナ。
上空から赤い光が大地に向けて撃ち込まれる。
ゴッ、ゴッ、ゴッと、更に続けて五つ。
逃げようとする人々の行く手を遮るかのように、赤い光が次々と地面に突き刺さる。

『ホントにねえ。まったく、ややこしい事をしてくれたよ。あのデカブツは』

「誰っ！？」

突如、脳裏に響いた女の声にレオナ達は辺りを見回す。
その気配に、真っ先に反応したのは誰であろうゴメだった。

「ピピィーーーッ！！」

「そこか、氷系呪文（ヒャダルコ）！」

その声に応じてバロンが上空に向けて呪文を放つ。
凍てつく冷気を纏った無数の氷塊が鋭い刃と化して、ゴメが示し

た方向へと吹き荒れた。

『巻き起これ炎よ！！』

男の声が響く。直後、炎の渦が巻き起こりヒャダルコの冷気とぶつかり合うと、やがて互いに消滅した。

「何者だ？」

ローブの中から金属製の小ぶりな杖を取りだしたバロンが、上空に向けて油断なく構える。

立ち上がったレオナを守るように、ダイが立つ。

その手にはレオナから万が一と預けられた聖なるナイフが握られていた。太陽の紋章が刻まれた、王家に伝わる三刀の内の一本である。

「ふむ。珍種とはいえ、たかがスライムごときに見破られるとは。メネロよ、お前の幻術も自分で言う程には大した事も無いな」

「馬鹿を言わないで。ただのスライムじゃないわよ、アレ。それに、他の人間は気付いてもいなかったでしょうに」

空気が歪む、とでも言えばいいのか。

ぐにゃりと歪んだ空間から二つの人影がにじみ出す様にして現れる。

一つは緑の髪に青い肌、扇情的な身体のラインを強調する様な服を着た妖艶な美女。

「……魔族か」

バロンの呟きに女が笑う。
特徴的な青い肌は、日の光を知らぬからだと、その身に流れる血が青いからだとも言われている。
見る者を虜にするような妖艶な美貌は、しかしその内に猛毒が含まれている様にバロンには感じられた。

「何者だ、貴様らは」

そしてもう一つ。
鍛え抜かれた屈強な肉体。口元が開いた銀色の仮面を着けた魔族の男。
その手には、両端に炎と氷、赤と青の意匠を施された三節棍が握られていた。

「お前達もアイツの仲間かっ！！」

ダイは決して気後れまいと、聖なるナイフを握り締める。
魔族の男はゴメスよりも小柄でありながらも、その肉体に秘められた力はザングレイに匹敵するのではないかとダイには感じられた。

二人の魔族がゆっくりと地面に降り立つ。
些細な動きも見逃すまいとレオナが身構える。

「フフフッ、可愛いじゃないアナタ」

「お褒め頂き光栄ね。そう言う貴方はどちら様？」

レオナは周囲を鼓舞するためにあえて軽口を叩いて見せる。その実は自身を鼓舞するためでもある。

「そうね、せっかくだから自己紹介でもしましょうか？　私の名前はメネロ。仲間内では妖魔将軍と呼ばれているの。そして彼がブレーガン」

よろしくね坊や、と。

突然“耳元で囁かれた”言葉に、ダイの身体に緊張が走る。

メネロは優しくダイの頬を撫でた。

「ッツ！？　うわああ！！」

その感触を振り払うように、慌ててナイフを横薙ぎにしたダイ。

しかし、その一撃は空を斬るのみ。

「そんなに怯えなくてもいいじゃない。そう思わない、可愛らしいオジョウチャン？」

「なっ！？」

（そんな、いつの間に！？　いつ動いたの！！）

今度はレオナの耳元でメネロが囁いていた。メネロの手がゆっくりとレオナの首に掛かる。

その感触に、レオナは思わず悲鳴を上げそうになるのを必死に堪えて呪文を唱えた。

「閃熱（ギラ）呪文！」

そこにいるであろう相手を狙って、振り向きざまに呪文を放つ。

「嘘！　そんな！？」

しかし、そこにメネロがいない。

「ホント、可愛いわねぇ」

クスクスと、たまらないと言った様子でメネロが笑っていた。その声にレオナが振り向けば、メネロは最初に降り立った場所から動いてはいない。

「マヌーサか」

「アラ、アナタには通じなかったのね。ふふっ、これは期待してもいいのかしら？　だったらアナタいいわよ、スッゴクね」

正解よと、バロンの呟きにウインクをして答えるメネロ。

「そう言う搦め手が大好きな馬鹿が知人でな」

あれが幻だった。その答えにダイとレオナの緊張が増す。

「いい加減にしろメネロ。遊びに来たのではない。慣れ合いなど不要だ」

腕を組み、これまで黙ってやりとりを見ていたブレーガンが口を挟んだ。何をしているのだ、と。

「見ろ、既にかなりの人間がこの場所から離れようとしている。これでは無駄な時間が掛かるぞ」

「私としては、別にもうどうでもいいような気もするんだけど。そ

れにこっちに来る人間もいるじゃない」

ほんっと、勘弁してほしいわよねえ。

メネロ呟き肩を竦めた瞬間、赤い光が撃ち込まれた地面が音を立てて盛り上がる。

「そんな！？」

その光景を見てダイが叫ぶ。

二本、三本と、巨大な腕が地面を突き破る。

やがて六本の腕を持った巨大なゴーレム――魔神像が姿を現した。

その数は六体。

目の前で起きたその光景を目撃した人々の驚愕は言うまでもない。

『オォオオオオオオオン！！』

咆哮を上げて動き出す魔神像。

「ああ、実はね、私達は中で暴れているおバカさんの尻拭いに来たのよ」

額にある紅い珠を輝かせ、土くれの巨人がその巨腕を振りかざす。

狙いは周囲を逃げ惑う人々だ。

「ホントはね、まだ私達の存在を知られるわけにはいかなかったのよ？　それをあのおバカは。だから、知られた以上は黙っててもらわないと困るのよ」

下っ端って辛いわよね。肩を竦めたメネロの手にはいつの間にか茨の鞭が握られていた。

二度、三度と振るう。パン、パンと空気を叩く乾いた音が響く。
その横で、ブレーガンが無言のまま三節棍を構える。
「手っ取り早く、ですって。残念だわ。本当よ？　だって、アナタ達みたいな可愛い子もみ～んなまとめて――」
「――殺さなくっちゃあいけないんですもの」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8664y/

ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

2011年11月27日02時57分発行